Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-29

ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記

山本，道雄

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,26:3-51

(Issue Date)
2014-11-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010325

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010325

ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフの

ハレ追放顛末記

山本 道雄

プロローグ　1 勅令　2「神学上の憎しみ」
I ブレスラウ時代　1 Praeceptor Germaniae　2 数学的方法への関心　3 ギムナージウム
II ライプチッヒ時代　1 学位取得　2 『ライプチッヒ学報』
III ハレ時代（1）　1 ハレ大学　2 数学・自然学関係の著作公刊　3 実験家・実践家ヴォルフ
IV ハレ時代（2）　1 ドイツ語著作集
V ピエティスト　1 ピエティスト　2 ランゲとヴォルフ　3「憎しみ」の醸成
VI「絞首刑に処されるべきものとして」　1 戦端　2 代理戦争　3 委員会の成立　4 王の一喝
VII 対決　1 形而上学　2 心身問題　3 結論捏造屋　4 非難合戦
VIII　収束に向けて　1 局面の展開　2 ハレ帰還
エピローグ　1 政治的側面　2 晩年のヴォルフ

文　献

プロローグ

1　勅令

一七二三年一一月一二日、大学でこれから自然学の講義に赴こうとするヴォルフのもとに、フリードリヒ王（一世）からの勅令が届けられる（一説では夕食時）。そこには、ヴォルフは一切の職から解かれ、「絞首刑に処されるべきものとして」、四八時間以内にハレおよびその他の王の領地を立ち去らねばならないとあった。著作や講義で啓示宗教に背く教説を講義しているという告発が、その理由である。

これはどうしたことか。二，三ヶ月前まではヴォルフに対するフリードリヒ王の覚

えはめでたかったはずだ。学内のピエティスト一派の攻撃に対して王は、ヨーロッパ思想界にその名を知られたこのスーパースターを擁護していたのではなかったか。ヴォルフを失うことはプロイセン王国にとっても損失なのだ。ヴォルフとともに学生たちもハレを去ってしまうだろう。それだけに軍人王のこの電撃の一打にヴォルフはさぞかし驚愕したに違いない。しかも「絞首刑」とは穏やかではない。これでは罪人扱いである。ヴォルフの与り知らないところで事態は破局に向かっていたようだ。激しい感情の動転のためヴォルフはその場に嘔吐する。

他方、彼にはせいせいした気分もあったのではなかろうか。ハレ大学神学部ピエティスト一派の、とくに「体系的正統派の切り込み隊長」(Wuttke, S. 18)である神学教授ヨアヒム・ランゲの、執拗な攻撃に彼は心底うんざりしていた。それはヴォルフからすればほとんど讒言である。「タエ重ナル忍耐ハツイニハ狂気トナル」とは、その頃の心中をヴォルフが託したラテン語の格言であった(Hartmann, S. 758)。弟子に論争を委ね自分は研究に専念したいともいっている。たとえハレ大学を追われても、ヴォルフにはドイツ国内の諸大学から、のみならずペテルブルクのアカデミーからも、教授職のオファーがある。現に去る六月一四日にはマールブルク大学から、住居と気象観測所付きで年収千ターラという、破格の条件でオファーがあったばかりではないか。ハレを去ってもヴォルフには何の後顧の憂いもなかったはずである。あるとすれば身重のためハレに残さざるをえない妻と幼い二人の子供のことだけだろう。

ともあれヴォルフは二人の同僚に別れを告げ、その夜のうちにザール川を渡りハレに隣接するザクセン領パッセンドルフに移る。翌日、知らせを聞いた学生たちが別れを告げに駆けつける。ヴォルフは彼らに講義料を払い戻し、イエーナ経由でマールブルクに向かって出発する。カッセルまでは愛弟子のテューミックが同行した。彼もまたこの事件のあおりを食らってハレ大学での教授職を失ったところだった。

２　「神学上の憎しみ」

以上が、当時ヨーロッパ思想界を激震させた大事件(Bianco, S. 111; Albrecht, S. 49)である、ヴォルフのハレ追放の最初のクライマックスである。ヴォルフのハレ追放といえば、ハレ大学副学長退任の記念講演「中国人の実践哲学」（一七二一年）に言及されるのがつねである（井川、二〇〇九年。石川、二〇一一年）。この講演でヴォルフは非キリスト教徒でも正しい政治的・道徳的格率に従うことができると主張する。これ

はヴォルフの理性主義の立場からすれば当然の主張であった。しかしまた宗教的真理は啓示においてのみ与えられるとする立場からすれば、ただちには受け入がたい主張でもある。無神論者にも理性がある以上、ヴォルフの主張からすれば彼らにも道徳的正当性が認められることになる。とくにこの講演でヴォルフは中国人の実践哲学を自分のそれと同一視した。これはかなり大胆な主張であったに違いない。これでは無神論者であることをヴォルフ自身が公言したかのように受け取られかねない。

しかし中国の哲学について論じることは当時のヨーロッパ思想界では珍しいことではなかった。ヴォルフに近いところではライプニッツがいる。しかもこの講演内容はこれまでヴォルフがその倫理学・政治哲学ですでに述べていることを超えるものではない。にもかかわらずこの講演がヴォルフのハレ追放という大事を招いたのは様々な要因が関与してのことである。講演「中国人の実践哲学」はこの破局に向けての外的原因であって、これが決定的理由となってヴォルフはハレを追放された訳ではないのである。現にのちに見るようにランゲとヴォルフの応酬では講演内容はテーマになっていない。講演は反ヴォルフ派に溜まっていたヴォルフに対する「神学上の憎しみ」（Gottsched, S. 55）のマグマが一挙に吹き出し、陰湿に繰り広げられてきた反ヴォルフ闘争が公然化する奇貨の役割を果たしたにすぎない。反ヴォルフ一派はこの講演を聴いて、得たりとばかりに、翌々日にはただちに行動を起こしている。双方の確執はやがてベルリンの宮廷まで巻き込みヨーロッパ中に知られる一大スキャンダルになるだろう。

それではどのような経緯を経て問題がそこまで深刻化したのだろうか。この点を確認するためには、事ここに至るまでのヴォルフの経歴をまず繙いてみる必要がある。

I ブレスラウ時代

１　Praeceptor Germaniae

ヴォルフは一六七九年一月二四日、ブレスラウ（現ポーランドのヴロツラフ）で生まれた。翌日にはルター派福音教会のマリア・マグダレーナ教会で洗礼を受けている。『ヴォルフ自伝』でヴォルフは一月二四日は「われわれの王」、つまりフリードリヒ大王の誕生日でもあることを注記している(Wolff, S. 109.『ヴォルフ自伝』からは、Wolff, S. 109, として引用)。ヴォルフは大王の父フリードリヒ一世によってハレを追われ、大王フリードリヒ二世によって凱旋将軍のように再びハレに迎え入れられるだろ

う。のちにわれわれはその情景を見る。

ヴォルフの父クリストフ・ヴォルフは革鞣工であり、息子三人、娘三人がいた。ヴォルフは第二子である。父クリストフは向学心に篤い人物だったが、その志は叶わなかった。断たれた夢の実現を父親は息子に託する。戦争のため厳しい時代が続き子供の教育は彼らにとって負担となった。『ヴォルフ自伝』によれば、「私の父は私が生まれるまえに私を研究に向かわせるための誓願を立て、この目的に必要なものを彼の財産から出し惜しみすることはなかった」(Wolff, S. 112)。父親は息子の進路を神学に定める。「牧師職として神に仕えるのが私の変わらぬ意図であった」(Wolff, S. 120)。

息子は父親の期待に十分すぎるほど応える。やがてヴォルフはヨーロッパ各王立科学アカデミーの会員に叙せられ（ロンドン、ベルリン、パリ、ペテルブルク)、ピヨトル大帝、フリードリヒ王、フリードリヒ大王をはじめとして王侯貴顕の覚えもめでたく、ハレ大学では学者として位階をのぼり詰め、ヴォルテールとも面識があり、フランス百科全書派にもその名を知られ、さらにはイギリスのニュートン学派の学者にも名前が届いた。一八世紀前半、ドイツ諸邦の大学の哲学教師ポストの大部分はヴォルフ学派によって占められ、この学派の影響はカントの晩年にまで残る。著作はイタリア語、スウェーデン語等に翻訳された。まさしくヴォルフは「ドイツ人の教師」、のみならず「全人類の教師」と呼ばれるにふさわしい存在であった(Klemme & Kuehn, p. 1290)。

２　数学的方法への関心

ヴォルフは敬虔な宗教的家庭環境のもとに育てられる。「両親は私のごく幼い頃から正義に対する大きな愛と不正に対する憎しみを、また宗教と神に対する畏れの念を植え付けた。私は雨の日も風の日も、あらゆる説教を聴き、中央教会での朝の祈祷に参加した。自宅では毎日聖書を読み、当時教会でよく歌われていた聖歌を暗唱した」(Wolff, S. 111)。幼児からすでに異彩を放っていたようである。父クリストフはラテン語初歩をヴォルフに手ほどきし、息子はこれを難なくマスターする。ラテン語の算術入門書から平方根や立方根の算出の仕方を習得している(Wolff, S. 118)。八歳の頃学校に通いはじめ、最初のクラスには三ヶ月しかとどまらず、初回の試験ですぐに次のクラスに進んだ。両親は旺盛な向学心に応えて息子をブレスラウのギムナージウムのひとつであるマリーエン＝マグダレーネンギムナージウムに進学させる(Ludovici, S.

539)。

当時、プロテスタント国のシュレージエンではカトリックの影響が伸張しつつあった。一六三八年以降、ジェスイットたちはブレスラウで地歩を固め、一六五七年には学校を創設して多くの学生を集める。さらに彼らは大学を創設しようとし、プロテスタント勢力の激しい反撃に遭遇する。「至る所で宗教闘争が繰り広げられていた」(Wuttke, S. 4)。ヴォルフはこのカトリックとプロテスタントとの対立・論争騒ぎを幼少の頃から間近で見聞している。彼は熱心にカトリック教徒とも議論したが、ルター派の解釈にも疑義を抱いた。しかし何れの側も相手を説得することができず、論争が不毛に終わるのを経験して、ヴォルフは「いかなる反論も許さないような仕方で、神学において真理を確立することが可能かどうか」(Wuttke, S. 4)、その方法に関心を示しはじめる。

ヴォルフはその方法を数学に見いだす。数学的推理は必然的であり、その結論は受け入れざるをえない。この方法が神学に適用できれば、不毛な神学論争は終わりを告げるに違いない。こうしてヴォルフは「数学的方法を哲学と神学に適用することができるようになるため」数学研究に熱心に取り組む(Wuttke, S. 5)。生涯にわたる数学的方法に対するヴォルフの関心の根はここにある。

付言すべきは、ひとつには、カトリックとプロテスタントとの論争に幼少の頃から触れたことは、やがてヴォルフのなかにスコラ哲学に対する関心と理解を深めたことである。のちにヴォルフはピエティストとの論争において、いかに自らの哲学がカトリック陣営に高く評価されているかを強調することになる。また後年の『存在論』(『ラテン語形而上学』)の序からはスコラ哲学との密接な連関が窺える。ライプニッツによりもトマスに大きな影響をうけたという解釈もある。トマスの影響はともかく、スコラの存在論の継承という点ではおそらくこの解釈は妥当だろう。

いまひとつ、数学的方法および自然学への関心によってヴォルフはデカルト以来のヨーロッパ近世哲学の重要な伝統に結びついたことである。これら双方ともにドイツ初期啓蒙哲学のもう一方の雄であるトマジウスには欠けていた。ピエティストであるトマジウスは反アリストテレス主義者であり、学問の数学的厳密性よりも世俗性と優美性を重視した。同じ啓蒙の哲学者でありながら、ヴォルフとトマジウスはその思想的バックボーンを異にする点に注意したい。

3　ギムナージウム

ギムナージウム時代、ヴォルフはどのような教育を受けたのだろうか。『ヴォルフ自伝』でヴォルフは恩義を受けた幾人かの教師の名前をあげている。「最大の恩義」を負っているとヴォルフに感謝されるのが、ポール教授である。学資に事欠き彼の私講義を聴講できなかったとき、教授はヴォルフに無料で聴講を認めている。これはヴォルフが大学に進学するまで続く。のちにヴォルフ自身ハレ大学で同じことを実践するであろう。クランツェンはヴォルフに歴史と教会史を個人的に教えた。エリフィウスは蔵書家であり、蔵書を講義に持参するのが習慣であった。しかし彼は哲学、とくに代数学を敵視してアリストファネス流にそれを笑いものにした。代数学を「隠された真理の発見法」として重視したヴォルフは、エリフィウスに自分の関心を隠さざるをえなかった。

これに対してポール、とくに神学者でもある監察官ガスパール・ノイマンは数学的方法に理解を示す。「ポール先生や監察官であるノイマン先生はデカルト哲学や数学、代数学に対する関心をますます私のうちにかき立てた」(Wolff, S. 114)。とくに神学と道徳における数学的方法の有効性をヴォルフに強調したのはノイマンである。ヴォルフが大学に進むために別れの挨拶に訪れ、イエーナで自然学と数学研究に専念したいむね告げたとき、ノイマンはそれを是とし、「神学者であり、自然学者であり、数学者であることは並のことではない」とヴォルフを激励する(Wolff, S. 122)。ヴォルフはノイマンからは説教と講義を通してつよい影響を受けることになる。

なおノイマンは死亡表の研究でも知られていて、彼の講義はヴォルフに統計学に対する関心を高めたとする解釈もある(Madonna, S. 8)。しかしノイマンはのちにヴォルフを故郷のギムナージウムの教授として招聘する話が持ちあがったとき、ヴォルフの実力を敬遠するあまり、この人事に反対した。ヴォルフはノイマンの介入をのちに知ることになるが、しかし『ヴォルフ自伝』ではノイマンへの言及は敬愛に満ちたものばかりである（ヴォルフ『詳解』第三六節も参照）。ヴォルフは終生ノイマンに対する敬愛の念を忘れなかった (Arnsperger, S. 8)。注目すべきことに、すでにこの時点でヴォルフはノイマンによってスピノザ主義者の嫌疑をかけられていたことである。ただしこのスピノザ主義は方法論に関わる概念であって、形而上学に関わるものではないだろう。ヴォルフの形而上学はこの時点ではまだ完成していない。のちに見るようにこの文脈でヴォルフに「スピノザ主義者」のスティグマが貼られるのは、ピエティス

トとの論争の過程においてである。

ギムナージウムでの神学の教育にヴォルフは満足している。イエーナ大学に進学したとき、神学に関しては新しいものを何も見いださなかった程である。他方、「ブレスラウで私は学問を学びたいと痛切に感じたが、その機会がなかった」という(Wolff, S. 118)。ここで「学問(scientia)」とはおそらく数学的諸学のことだろう。ブレスラウのギムナージウムではこの点の教育が不十分だった。「天球論」と幾何学的図形の記号以外は何も教えられていない。代数学についてはクラヴィウスの全集以外にはいかなる書物もない。幾何学ではたいした進歩を遂げることができなかった。チルンハウスの『精神の治癒あるいは真の論理学試論』（一六八七）はまだ読むことができないでいる。「精神の治癒(medicina mentis)」とは知性改善のことであろう。ちなみに『精神の治癒』というタイトルはごく一般的であったことが推察される。ランゲにも同名の著書がある。のちにヴォルフはこれを酷評することになる。

ヴォルフはこれらの不足を満たすべくイエーナの大学に進む。数学に対するヴォルフの関心には並々ならぬものがあった。しかしヴォルフの「主要目的」は神学にあったから、数学は「副業」(Wolff, S. 127)以上のものではありえない。数学研究は知性を磨き、真理の正しい認識において知性を教導するための規則をそこから抽象するためである(Wolff, S. 127)。ヴォルフにとっても数学は medicina mentis なのである。

II　ライプチッヒ時代

1　学位取得

一六九九年、ヴォルフはハンベルガー教授に数学と物理学を学ぶためイエーナに移り、一七〇二年終わりまで留まる。最初の半年間、彼のもとでシュトルムの数学・物理学関係のテキストを用いた講義を聴講している。ハンベルガー教授はシュトルムの『数学精選』、『数学概要』、『数学教程』、『物理学案内』をテキストに用いた(Wolff, S. 120)。

一七〇二年冒頭、ライプチッヒ大学で修士試験をパスする。一七〇三年冒頭、『数学的方法によって構想された普遍実践哲学』によって大学教授資格取得試験に合格して私講師になる。ヴォルフ、二三歳のときである。この論文のタイトルにはギムナージウム時代以来のヴォルフの学問的・実践的関心が簡潔的確に表現されている。

ライプチッヒ大学では講読教師として数学、自然学、哲学、神学の講義を担当する。

チルンハウスの『精神の治癒』を参照にして論理学の講義や、「副業」としての数学の入門的講義も行っている(Wolff, S. 139)。大学図書館が貧弱であり、またヴォルフには蔵書がなかったので、友人同僚から書籍を借り受けドイツ語で「概要」を作成している。当時はヴォルフのように、実践哲学を数学的方法によって論じる哲学者はきわめて珍しかった。新任教員に対する学生の信頼と人気は大きく、聴講生は日に日に増えていった。この人気はハレ大学に移っても変わることがない。やがてこのことも神学部のピエティストの反感を招く一因になるのである。

ちなみにヴォルフは牧師としての仕事もこなしている。彼の説教には人気があったようだ。一七〇六年、ライプチッヒ滞在の最後の年、最終説教をニコライ教会で行っている(Wolff, S. 128)。

一七〇五年にはライプチッヒでチルンハウスに会って「実在的定義」について議論を交わし(Wolff, S. 125)、当時あまり知られていなかった微分法の学習法を尋ねている。チルンハウスは、バロウの幾何学講義やニーウヴェンティートの無限解析論、オザナムの代数学原論を推薦し、ヴォルフはこれらを入手して微分法についての最初の理解を得る(Wolff, S. 126)。のちにヴォルフは学位論文をチルンハウスにも献呈し、チルンハウスはこの書を自らの『精神の治癒』の成果だと自慢する(Wolff, S. 134)。

チルンハウスの没後（一七〇八年）、ヴォルフは彼の栄誉が世に語り継がれるように遺稿の整理に当たったが、スピノザ主義者の烙印を押されるのを懸念してのことか、彼はノート類をすべて焼却していた。チルンハウスもまたスピノザ主義者の嫌疑をかけられ、トマジウスや敬虔主義派の牧師から絶えず批判されていたのである。ハレ近くのある研究機関にポストが提示されたとき、彼はハレ大学のピエティストによる攻撃を懸念して辞退している。亡くなったときその土地の牧師から教会への埋葬を拒絶された(Klemme & Kuehn, p. 1201)。

２　『ライプチッヒ学報』

ヴォルフの学位論文の審査員の一人にライプチッヒ大学の道徳学と政治学の教授であるオットー・メンケがいる。彼はラテン語の学術雑誌『ライプチッヒ学報』を創刊し、ドイツの学者たちに領邦をこえた協力を呼びかける。メンケはヴォルフを雑誌の編集協力者にする意図から、彼の学位論文に対する評価を求めてこれを無断でライプニッツに送る。ライプニッツはメンケに対する返書でヴォルフの論文に本人が読ん

で赤面するほどの高い評価を与える(Wolff, S. 133)。ここからヴォルフとライプニッツとの交流が始まる。文通は一二七通にのぼる。二人はベルリンとハレで一七〇六年、一七一三年、一七一六年に会っている。

ヴォルフに対するライプニッツの影響関係についてはここでは論及できない。研究者の間ではライプニッツに対するヴォルフの独立性を強調する意見の強いことを指摘しておきたい(Arnsperger, 1897; Corr, 1972, 1974, 1975)。いまひとつ。ヴォルフの哲学を評してライプニッツ哲学の通俗化という言い方がときになされるがが、これはことの一面しか見ていない解釈である。ライプニッツとヴォルフとの間にはおそらく一七世紀から一八世紀にかけての、形而上学の世俗化とでも呼ばれるべき大きな変化が進行していたのではないか。「可能性」概念の変質にそのひとつの例を認めることができるだろう（山本、二〇一〇年、五六頁）。

なおさきの返書でライプニッツは三段論法に対するヴォルフの誤解を正している。当時三段論法はデカルトの影響もあって、真理発見の方法としては否定的に評価されていた。ヴォルフは三段論法理解をチルンハウスから学び、三段論法に対する評価の点ではハンベルガー教授やイエーナの著名な数学者であるヴァイゲルも同意見であった(Wolff, S. 135)。しかしヴォルフによれば「推理の最初の起源に思い至ったとき、またそれによって推理によっていかに仮定されたものからまだ知られていない、あるいは知られていないと前提されている結論に至るのかを理解したとき、久しい探求のすえ私は別の意見を抱くようになった」(Wolff, S. 137)。ここにはライプニッツによる三段論法批判の影響がある。この考え方はのちにランベルトによって発見的証明という観念によって活かされるだろう（山本、二〇一〇年、三一二頁）。

こうしてヴォルフは『ライプチッヒ学報』の編集協力者になるが、ルドヴィッチによれば、一七〇五年から一七一七年の間にヴォルフ自身この雑誌に二四七本以上の書評を寄稿した。なおヴォルフは当時、ライプニッツの哲学について一六八四年に『ライプチッヒ学報』に掲載された『認識、真理、観念についての省察』と、予定調和説について書かれているベイルの『辞書』しか知らなかった(Wolff, S. 141)。『弁神論』が公刊されるのはさきのことであり（一七一〇年）、モナドについてのライプニッツの小冊子がケラーの独訳で紹介されるのは、さらに一〇年後である。

III　ハレ時代（1）

1 ハレ大学

一七〇六年、ヴォルフはギーセン大学から数学教授として招聘を受ける。あたかもカール四世のスウエーデン軍がザクセンに進入したときだった。「ライプチッヒから多くの人々が逃げ出し学生たちも去ったので、〔中略〕オットー・メンケは｛ヴォルフが｝『ライプチッヒ学報』のためハレに移ることを望んだ」(Wolff, S. 138)。しかし定員の事情でライプチッヒ大学では就職の見込みがない。ヴォルフはギーセン大学に行くことを決めその地に赴くが、辞令交付までに間があったのでハレ経由でいったんブレスラウに帰郷することにし、途上ハレ大学に寄る。このときハレ大学副学長から数学教授就任を懇請される。ライプニッツの強力な推輓もあって、ヴォルフはギーセン大学就職を翻意し、ハレ大学に就職することに決める(Wolff, S. 145)。一七〇六年一一月二日、二七歳のヴォルフは数学の正教授としてハレ大学に着任する。給与は二〇〇ターラだった。

ちなみにカントはケーニヒスベルク大学では二三六ターラの給与だった。後年彼は当時のプロイセン文部大臣ツエートリッツから六〇〇ターラの条件でハレ大学に招聘されている。カントがこれを断るとさらに二〇〇ターラが上乗せされたが、カントはこれも断る（山本、一九九二年、二九頁）。

ここでハレ大学について瞥見しておきたい。プロイセン王国には既にケーニヒスベルク、フランクフルト・アム・オーダー、ドゥイスブルクに大学があった(Raabe, S. 57)。これらに加えてハレ大学は一六九四年、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ三世の肝いりで創設される。この大学の創立に与って力あったのが当時ライプチッヒ大学にいたクリスティアン・トマジウスである。ライプチッヒ大学は当時まだ旧態依然たるアリストテレス・スコラ哲学の影響下にあった。トマジウスはこのライプチッヒ大学の旧弊ぶりに反抗して大学を出る。やがて彼はかつての同僚である神学者アウグスト・ヘルマン・フランケをハレ大学に引き抜く。この二人をぬきにしてハレ大学の存立とその後の大きな影響力は考えられないとされる(Schrader, S. 8)。彼ら二人は多くの学生を大学に引き寄せた。ちなみにトマジウスは現代のハレの街に通りの名称としてその名を残している。

ハレ大学にはヨーロッパ各地から学生たちが集まって来ている(Schrader, S. 65; ヴァイグル、六一頁以下)。開学当初の学生数は七〇〇名を越えている。四学部からなり、

神学部にはアウグスト・ヘルマン・フランケ、ヨアヒム・ユストゥス・ブライトハウプト、ポール・アントン、法学部にはクリスティアン・トマジウス、サムエル・シュティク、医学部にはフリードリヒ・ホフマン、ゲオルク・エルンスト・シュタール、哲学部にはクリストフ・ケラリウス、ヨハン･ペーター・ルーデヴィッヒがいる。トマジウスは法学において、ホフマンとシュタールは医学や化学の世界において名を知られていた。とくに後二者の故にハレは医学の領域ではライデン大学に匹敵したという意見もある(Schrader, S. 56)。カントも初期の論文で彼ら二人に言及している。これらの教師たちはそれぞれの領域で名をなしていて、学生たちを大学に呼び寄せた。しかし他の三学部に比して哲学部はヴォルフが着任するまでは名の知られた教授はいなかったようである。

トマジウスもフランケも共にピエティストである。ここから窺えるように、ハレ大学はピエティストの影響の濃厚な大学であった。ホフマンもピエティストである。シュラーダーによれば、ヴォルフ着任まではハレ大学には教員たちの同質の倫理的･学問的理念による連帯があり、温かい雰囲気に包まれていた。しかし「彼らの真っ只中に精神力においては劣ることはないが、根本的に異なった考え方と心情の持ち主が乗り込んできた。彼の教説は深みと内面性において劣るが、しかし思考の展開において彼らよりも力強く表現において鋭かった」(Schrader, S. 168)。ヴォルフの乾いた散文的文体と数学的方法からすれば、「深みと内面性において劣る」と評されるのも無理からぬことかも知れない。このヴォルフが後に半世紀以上にわたってドイツの思想界に大きな影響力を発揮することになる。

トマジウスらとヴォルフは信仰において教養において異なった世界を背景にしている点に注意したい。ヴォルフはピエティストではなく福音教会派に属する。さきにも言及したように、トマジウスとフランケはスコラ哲学に対して批判的であるが、対するにヴォルフはスコラ哲学に十分に通じていてこれを重視する。ヴォルフは、ハレ大学の私の聴講生はスコラの術語について何も質問しない、なぜなら彼らは神学者からも法学者からもそれについて何も聞かされていないからである、と慨嘆している。さらにトマジウスらは数学･自然学的諸学に関心がない。対するにヴォルフはデカルトに発する近世哲学のこの重要な伝統に結びついている。ピエティストとヴォルフのあいだには背景的教養においてこのような根本的な相違もあった。ただしこのことが直接双方の確執の原因になった訳ではない。

２　数学・自然学関係の著作公刊

ハレ大学の状況はヴォルフが期待していたのとは異なっていた。数学は知られていない。人々の関心は知識の確実性にはなかった。ヴォルフは最初は哲学講義には関わらず、数学、代数学、建築学、都市建築法、築城法を講じている。実験器具を自ら調達して実験物理学、さらに理論物理学も講義する。これらの活動のなかから自然学関係の著作や論文が執筆される。以下ではまずこの点から紹介したい。

一七〇九年には『いくつかの大気の力と特性について幾何学者の方法によって論証される気象学原理』が刊行されるが、この書は二つの理由で注目に値する。ひとつはここでは哲学の課題が存在の普遍的特性の分析に求められている。ヴォルフはこの問題設定においてスコラ哲学の衣鉢を継ぐ。ヴォルフ哲学の存在論の骨格がここに定まる。「第一哲学はすべての存在に属するものの一般的概念を展開し、いくつかの学科において関連づけられるべき論証の出発点たるもっとも普遍的な真理を、それら概念から演繹しなければならない」(Aerometriae Elementa, Scholion II)。

この規定は九年後の『数学ならびに普遍哲学へのヴォルフの講義案内』における哲学に関する規定を経由して、やがて体系期のヴォルフの哲学観を根本的に規定するものとなる。ちなみに『講義案内』では哲学は次のように定義されている。「私にとって哲学とはすべての可能的ものについての学問である。かくて哲学の対象には現実に存在したものであれそうでないものであれ存在しうるかぎりは、存在するであろう一切のものが関わらなければならない」(第二部第一章第三節)。しかるに『気象学原理』でヴォルフは「学問(scientia)」を次のように定義していた。「学問とは確実な諸原理から結論を導出し、導出されたものを実践的な事柄に巧みに適用する精神の練達さを意味する」(『気象学原理』系１)。学問観の実践的側面に注意したい。しかし一七二八年のラテン語論理学への『序説』ではこの規定は消える。「学問ということで私はここでは、言明を論証するうえでの練達性、つまり確実にして不動の諸原理から正しい推理を通じて推論するうえでの練達性のことを理解している」(『序説』第三〇節)。

この書が注目されるべきいまひとつの理由は、これによってヴォルフの名前がニュートン学派のキールをはじめ多くの外国の研究者に注目されはじめた点である。数学的方法によって気象学を論じるのはヴォルフのこの論文が最初の試みである。この書でヴォルフはキールの『真の自然学への案内』での真空の存在証明に見られる誤謬推理について批判する。一七一〇年、キールはヴォルフの批判に対して書簡で丁寧に応

答し、これが『ライプチッヒ学報』に掲載される。これに対するヴォルフの丁寧な再反論が同誌に掲載される(Ludovici, S. 559, 568)。周知のようにキールはニュートン学派の熱烈なプロパガンディストである。一七〇八年頃に始まるライプニッツとニュートンの微積分法の先取権争いではニュートン学派の急先鋒の役割を演じている。

一七一〇年、小さな八巻本で最初の『数学的諸原理』を刊行する。この書は好評を博して版を重ねる。ゴットシェートのヴォルフ伝には、ドレスデン近郊の農夫がこの書によって独学で数学を理解したエピソードが紹介されている(Gottsched, S. 32)。ちなみに同じ一七一〇年、ライプニッツの『弁神論』が現れている。ここでライプニッツは哲学の二大原理として矛盾律と充足理由律を掲げる。この二大原理はのちにヴォルフの『ドイツ語形而上学』（第一〇、三〇節）に、さらに『ラテン語存在論』（第一四節）に、継承される。この二大原理はヴォルフ哲学の体系的基盤である。

一七一一年、『気象学原理』および以前に公表されていたラテン語論文「冬について」によって、ヴォルフはロイアル・ソサイエティに入会を認められる。「有名なウッドワード博士はロンドンから私に手紙で〔中略〕全員が私の会員推薦を一致して承諾したと書いてよこした」(Wolff, S. 150)。

同じ一七一一年、ロイアル・ソサイエティに入会後ほどなくして、ヴォルフはライプニッツの推挙でベルリン・アカデミーのメンバーとなる。ヴォルフのここまでの業績からして、いずれのアカデミーにおいても、入会に際しては数学的自然学的業績が重視されていたことが分かる。

一七一二年、『人間悟性の思考力についての理性的思考』、いわゆる『ドイツ語論理学』が刊行される。これは体系的著作全体に対する序論という位置を占める。同書はドイツ学校哲学の論理学思想に決定的影響を残す。ラテン語、フランス語、英語、イタリア語、ロシア語、デンマーク語に翻訳され、ヴォルフの生前すでに一四版を重ねている。のちにカントはこの論理学書を「最良」と評することになるだろう。

他研究機関からのポストの提示は止むことはなかった。ヴィッテンベルク大学から数学教授のポストを打診されるが、プロイセン王は待遇改善によってヴォルフを引き留めにかかった。一七一五年二月、諸々の好条件とともにヴォルフには「枢密顧問官」の称号が付与される。

同年、ロシアのピョートル大帝からきわめて有利な条件で、ペテルブルクのロシア科学アカデミーの数学と自然学の顧問のポストが打診される。大帝は国内の都市、港

湾、交通網の改造に取り組んでいて、これらの問題に助言を与えることのできる学者を必要としていた。「この招聘ほどヴォルフにとっての栄誉はなかった。」しかしライプニッツの忠告に従ってヴォルフはこれを断っている。プロイセンあるいはドイツがヴォルフを奪われるのを欲しなかった(Gottsched, S. 37)。

同じ頃、ハンベルガー教授の後任として、ワイマール宮廷からもイエーナ大学数学教授のポストが提示されるが、ヴォルフはこれを断る。

ニュートン主義者によるヨアヒム・ベルヌイ非難に対するヴォルフの掩護にも触れておくべきだろう。ベルヌイがニュートンの『プリンキピア』における誤謬をある論文で指摘したところ（「求心力の逆自乗の問題の解決」）、某イギリス人が二度にわたり悪意と怒りに満ちた反論を展開した。ヴォルフはこれに対して一七一六年七月号の『ライプチッヒ学報』誌上において匿名でベルヌイを掩護した(Gottsched, S. 39)。

なお一七一六年三月九日、ヴォルフはハレの修道院の役人であるブランディスの娘カタリーナ・マリアと結婚する。彼女とのあいだに三人の息子をもうけることになる。

３　実験家・実践家ヴォルフ

ヴォルフの哲学といえば三段論法で固められた堅固な体系的哲学を思い浮かべるのが普通であるかも知れない。〈独断主義者〉ヴォルフという誤った先入見（あるいは不適切な訳語）がこの傾向を強める。しかしうえに見たように、ヴォルフのペテルブルク招聘の理由はきわめて実践的な問題の顧問としてであった。またヴォルフは実験家でもある。既述のようにハレ大学で彼は実験物理学を講じている。ヴォルフの「学問」観の実践的性格については既に指摘した通りである。自然科学の領域におけるヴォルフの不滅の功績として、当時のドイツにおいてただ一人ヴォルフが顕微鏡による観察に努め、他の研究者にも勧めたことがあげられることもある。ヴォルフは顕微鏡による観察において感覚をどこまで信頼してよいかというきわめて哲学的な問題も提起した(Schrader, S. 172)。のちにヴォルフは「理性と経験の結婚」を強調することになるが（山本、二〇一〇年、索引）、その「経験」は実験によって確証される経験でもある。この実験精神の正統な継承者は当時のドイツ学校哲学にあってはひとりランベルトだけだろう。体系哲学者ヴォルフの影に隠れてしまっているが、ルドヴィッチのヴォルフ伝から窺えるような実験家ヴォルフの像はもっと強調されるべきだろう。

実践的哲学者ヴォルフの像を伝えるエピソードも紹介しておきたい。一七一六年、

ヴォルフはウイーンからの帰路にあったライプニッツにハレで会う。彼らが交わした会話は意外にも、予定調和説や可能的世界論という哲学的テーマについてではなく、一七〇九年にヴォルフが執筆した穀物増産の論文に関する実践的テーマについてだった。当時ヴォルフはフランスの某神父の実験に触発されて、自らも麦増産のための実験を試みている (Ludovici, S. 559)。穀物増産は当時国家にとって喫緊の課題であっただろう。二人にとって「真の知識は幸福についての知識」なのである。ライプニッツは当時この研究を続行するようにヴォルフを督励した。今回の対談でライプニッツはこの件を持ち出し、ヴォルフに「人類の健康に益するこの有用な発明を世間に公表するように」ふたたび督促した。その仕事は「穀物の驚くべき増産の真の原因について」という標題の下に、一七一八年ハレで出版された。その後一七二五年に増補版が出版されている。一七三四年には英語版も出ている(Gottsched, S. 41)。ゴットシェートは二人を「現代のプラトンとアリストテレス」に譬えている。いささか大げさではあるが、ヴォルフにおける実験的・実践的精神の強調としてはよく理解できる譬えである。

これら以外にもヴォルフはボイルやマリオットの光学実験の追実験や、異常な気象現象についての報告と分析を試みている(Ludovici, S. 557f)。おそらく衝突についてのマリオットの定理についても追実験しているだろう。これらについての詳しい報告は一七五五年に刊行された『数学形而上学研究論集』に納められている。後にヴォルフは『世界論』（一七三一年）で衝突の諸定理を代数的手法によって完璧に導出することになる（山本、二〇一〇年、九三頁以下）。ヴォルフの論理学書や哲学書ではしばしば自然学関係の実験や命題に言及されているが、それは彼の実際の仕事に基づいてのことなのである。この意味では著作だけではなく、『ライプチッヒ学報』誌上でのヴォルフの仕事も参照されるべきであろうが、ここでは遺憾ながらそれはできない。この誌上では体系的哲学者ヴォルフではなく、実験哲学者ヴォルフの業績も確認できるかも知れない。またイギリスをはじめとする国外の学者とのやりとりも、この誌上において確認できるだろう。付言すればヴォルフは英語論文の書評や翻訳をこの『ライプチッヒ学報』誌上に寄稿している(Ludovici, S. 556, 558)。ヴォルフは英語にも堪能だったようだ。

一七一八年、先述の『数学ならびに普遍哲学へのヴォルフの講義案内』が刊行される。

IV　ハレ時代（２）

１　ドイツ語著作集

ヴォルフはもともと数学･自然学担当の教授としてハレ大学に招聘された訳だが、一七〇九年以降、周囲の要請に応えて論理学、形而上学、倫理学も担当することになる。ヴォルフの哲学体系を構成するドイツ語著作群はこの講義活動を通して準備される。ハレ大学では哲学講義はすでにトマジウスとリュディガーが担当し聴講生の多くを集めていたが、そのスタイルはヴォルフの「流儀」ではない(Wolff, S. 146)。ヴォルフは数学的方法という自分の流儀にしたがって講義活動を開始し、その評判はまもなくトマジウスらを凌駕する。ヴォルフの人気は学生の間で高まるが、しかしそれはまた同僚間、とくに神学部教員のあいだに反発と干渉を誘発することになる。やがて彼らはヴォルフに対して講義活動を自然学と数学に限定するようにと要求することになるだろう。

ヴォルフはハレ大学に移ってのちドイツ語で講義をはじめる。ヴォルフによれば、ドイツ語での著述は学生が聴講に注意を集中できるようにという配慮からである。また筆写の際の誤解や曲解を防ぐためでもある。「学生たちは聴講と筆記とを同時にしており、そのため効果をあげるためには講義にのみ向けなくてはならない注意力を、聴講と筆記との双方に分散させてしまう」（『ドイツ語形而上学』第二版序論）。ドイツ語著作はいわば講義の教科書であり、詳細はラテン語著作に盛り込むという。ラテン語著作はドイツ語を解さない外国人読者のためである。ヴォルフは学術語としてのドイツ語に自信を持っていた。ラテン語よりはドイツ語は学術語に適しているという（『詳解』第二章）。このドイツ語著作を通してドイツ語による哲学的概念が彫琢される。これは哲学の領域における画期的業績であって、クリスティアン・ヴォルフと共にドイツ哲学が開始されたというヴトケの言は決して誇張ではない(Wuttke, S. 95)。

さきに述べたように、一七一二年には哲学体系の導入部に当たる論理学がドイツ語で公にされた。これをうけて哲学諸学の講義活動がいわゆるドイツ語著作群となって結実しはじめ、ヴォルフがハレを追放されて後の一七二六年まで矢継ぎ早に公刊される。これらの著作集はハレ大学での講義活動の集大成である。ゴットシェートは「一年デ成熟スルモノナシ」というホラティウスの警句を掲げている(Gottsched, S. 46)。

まず一七一九年、ヴォルフ哲学の本丸ともいうべき『神、世界、人間の精神、なら

びにすべての存在一般についての理性的思考』、いわゆる『ドイツ語形而上学』が刊行される。ヴォルフ四〇歳の時である。

『ドイツ語形而上学』では矛盾律と充足根拠律が二大形而上学的原理として提示される。第一版序論結部でヴォルフは、同書を理解するための「忍耐と注意力」を読者に求めている。言葉を「意図的に曲解」して「不合理で危険な見解を私に押しつけないような誠実さを望む」という。これは既にピエティストによるヴォルフ批判のあったことを窺わせる言葉である。ヴォルフはのちに「不合理で危険な見解」を押しつけるピエティストのやり方を「結論捏造」と批判することになるだろう。

ドイツ語著作としては、『幸福促進のための人間の行為についての理性的思考』（ハレ、一七二〇年、いわゆる「ドイツ語倫理学」）、『人間の社会生活についての理性的思考』（ハレ、一七二一年、いわゆる「ドイツ語政治学」）、『自然の諸作用についての理性的思考』（一七二三年、ハレ、いわゆる「ドイツ語自然学」）、『自然的存在の意図についての理性的思考』（一七二三年、いわゆる「ドイツ語目的論」）がある。それらのタイトルはすべて「―――についての理性的思考」という同じ表現で始まっている。その表現は祝宴の開始を告げるトランペット吹奏にも似ていて、著作の精神が啓蒙主義に属することを告げていた(Hinske, S. 405)。

一七二〇年にはモナドについてのライプニッツの小冊子がケラーの独訳によって『モナドロジー』という表題のもとに出版され、ヴォルフがこれに長文の序論を付している。

ヴォルフのハレ追放（一七二三年）後まで目をやって、いま少しドイツ語著作集の帰趨を見定めておいた方がよいだろう。一七二四年、ヴォルフは『神、世界、人間の心、ならびにすべての存在一般についての理性的思考注解』（『注解』）を著し、ハレの論敵の批判に応える。次いで一七二六年にはイエーナの神学者ブッデの批判に対抗して、『ドイツ語で出版されたヴォルフの著作についての詳しい解説』（『詳解』）を公刊する。これがヴォルフのドイツ語著作シリーズの掉尾を飾ることになる。この書は世間に向けられたヴォルフのアポロギアの書である(Arndt, S. 1996)。二年後の一七二八年からはかねて予告していたように（一七二一年『ドイツ語形而上学』第二序論）、論理学を巻頭とするラテン語シリーズの刊行が始まり、ここでヴォルフはヨーロッパ世界に向けて積極的に発信を開始する。

ラテン語著作では『存在論』や『世界論』でスピノザ批判が展開されることもある

が、これは明らかにハレ事件の残響であろう。またライプニッツからの距離を伺わせる主張も見られる。一例をあげれば、『世界論』第二四三節注解には、モナドのことはライプニッツに任せるという表現が見られる（山本、二〇一〇年、八六頁）。しかし自分の哲学とライプニッツ哲学の関係についてのヴォルフの理解には基本的変化はないと見るべきだろう。双方の関係については「私の体系が終わったところでライプニッツの体系が始まる」という晩年の表現がよく知られているが（一七四六年五月一一日のマントイフェル宛ヴォルフ書簡。Arndt, 1980, S. 10）、しかしこの主張の実質は既に『ドイツ語形而上学』の第二序論（一七二一年）で明言されている。心身問題や予定調和説についても、その理解がより慎重になったということはできても、評価が劇的に変わった訳ではない。カントの〈独断のまどろみからの覚醒〉に比しうるダイナミックな思想的展開はヴォルフには見られない。ヴォルフの思想ははやくから完成していたのである。

ちなみに「ライプニッツ＝ヴォルフ哲学」という呼称は、ヴォルフのいうように彼の弟子ビルフィンガーに由来するのではなく、遅くとも一七二四年までにハレのピエティストによるヴォルフ批判から生まれたとされる(Arndt, 1980, S. 5, Fußnote 11; Beutel, S. 181)。

V　ピエティスト

1　ピエティスト

さてこうしてようやく「プロローグ」で筆を擱いた地点にたどり着いたことになる。

一七二一年七月一二日、ヴォルフは「中国人の実践哲学」という演題で恒例の副学長退任記念講演を行い、次期副学長を他ならぬ神学部教授ヨアヒム・ランゲに託す。先述のように、この講演が発端となってヴォルフのハレ追放というヨーロッパ思想界を震撼させる事件が引き起こされる。この事件を先導したのは神学部教授のヘルマン・フランケ（一六六三〜一七二七）である。フランケはフリードリヒ王との個人的な関係を利用してヴォルフ追放に決定的な役回りを演じることになる。ピエティスムスは軍人王フリードリヒ王の資質によく合った。ちなみにフレデリック学院時代のカントの師であるアルベルト・シュルツはハレ大学時代、フランケの感化を受けている。

もう一人の重要な登場人物はフランケを熱烈尊敬する神学教授ヨアヒム・ランゲ（一六七〇〜一七四四）である。ランゲは執拗にヴォルフ批判の文章を著してヴォル

フを悩ませる。

ピエティストとヴォルフを互いに不倶戴天の敵のように考えるのは正確ではない。たしかにヴォルフは正統福音教会派に属しピエティストと信仰上の立場を異にする。後述するように、ピエティストとの論争の過程で彼らの教義に疑問を呈したこともある。しかし彼はピエティストに好意的であったこともある。またピエティストのなかには親ヴォルフ派もいた。のみならずヴォルフの数学的方法はフランケの創設になるハレの孤児院の教育システムに取り入れられている。フランケが試験を行うときヴォルフはつねに同席を求められた(Hinrichs, S. 399)。

ピエティストとヴォルフの微妙な関係についていま少し付け加えたい。さきほどのシュルツはピエティストでありながらヴォルフ哲学の影響も受け、ピエティストでありかつヴォルフ主義者である。フランケとヴォルフはシュルツのためハレ大学でのポスト獲得のために奔走したこともあった。しかし両人の確執のためこの話は立ち消えになる。いまひとつ注目すべき事実をあげれば、ヴォルフの仇敵であるランゲ自身が、晩年、研究方法論においてヴォルフのそれに接近している(Sträter, S. 92f)。一七三六年五月一四日付のある文章でランゲは次のようにいう。

> 私は以前から、聖書や神学｛を研究する際｝に、また自然の領域と並ぶ神の認識に精励する際に、上述の哲学の秩序だった説得的な教授方法と共に理性の正しい使用をわがものにし、理性を拳々服膺すべきであることによく気がついていた。だからもしこのことがヴォルフ的なるものであるのなら、私もまたヴォルフ主義者であるかもしれないことを証言する。なぜなら私もそのようにすることを私の著作において努力したし、講義では私の聴講者をそのように導いていたからである。(Wuttke, S. 18)

しかしうえの文章でランゲは「われわれの教会の神学者では理性の原理はつねに啓示の原理に従属している」と続けて、ヴォルフ主義者であることを否定している。これはピエティストとしては当然の主張であろう。これに対してヴォルフは理性の自律性を強調する（『ドイツ語倫理学』第二〇節）。これはヴォルフをピエティストから決定的に分かつ論点であり、彼をカントの道徳哲学に結びつける論点でもあるだろう。

ヴォルフ哲学とピエティストの関係は単純ではないのである。双方の対立は方法論においてではなく、哲学上の教説、例えば予定調和説（ピエティストは物理影響説に

立つ）や人間的自由の可能性をめぐる。予定調和説に立てば行為の帰責性が曖昧になり、かくて罪や罰の概念も曖昧になる。のちにランゲはヴォルフとの論争において、「この予定調和説によって、心は身体を動かすことができず、口は心の理性的な介入なしに一切を語ることができるとされる」と非難することになる(Hartmann, S.738)。また充足根拠律に立って一切の出来事に根拠を認めれば、人間の自由が、したがって信仰の可能性が危うくなる。ヴォルフが「スピノザ主義者」として非難されるのはこの文脈においてである。しかし双方の対立はこのような理論的立場の故ばかりではなく、もっと生臭い人間的ドラマの産物でもあった。この点をわれわれは以下に見るだろう。

ちなみにフランケはハレ大学でヴォルフに対立したばかりではない。それ以前に同じピエティストである法学部のトマジウスに対しても激しい批判を浴びせたことがある。双方はかつて思想的盟友であり、既に見たようにライプチッヒ大学からハレ大学にフランケを引き抜いたのはトマジウスだった。トマジウスはピエティスト流の厳格な宗教教育では学生に「奴隷的心情」(Hinrichs, S. 371)を植え付けるとしてこれに反対し、寛容、世俗性、優美の精神の必要を唱えた。こうして一方は相手を無神論者と難じ、他方は相手の偽善と世俗的野心を糾弾するまでになる(Holloran, S. 370)。結局、トマジウスはフランケの画策によって哲学の講義を禁止される。フランケはヴォルフ攻撃に際しても類似の画策を弄することだろう。

２　ランゲとヴォルフ

ランゲはヴォルフが追放された一七二三年から多くのヴォルフ論難の文章を著している。両陣営の応酬はフリードリヒ王の勅令によって論争中止が命じられる一七三六年まで続く。ランゲのヴォルフ批判についてはそれを低く評価する論者もいるが(Wundt, S. 238; École, Préface à Langes *Causa Dei*)、他方、その哲学的価値を取り出そうとする試みもある。ここではその逐一に立ち入るには及ばない。しかし公平さのために、ランゲのヴォルフ批判がクルージウスによるヴォルフ＝ライプニッツの自由論批判に、したがってカントの自由論にも通じる論点を含みうることだけ指摘しておくべきだろう(Bianco)。神学者ランゲのヴォルフ批判は哲学者クルージウスとカントに継承されたことになる。双方の応酬に関してはのちに改めて概観したい。

ランゲは優秀な神学者ではあった。神学の知識に関してランゲはフランケに勝ると

いう意見もある(Schrader, S. 133)。しかし彼はヴォルフだけではなく多くの学者と激しい論争を繰り広げたようだ。その苛烈な論争スタイルはハレ大学の同僚間でも問題視されている。ヴォルフ自身、「悪罵と侮辱」からなるランゲの「苛烈な筆法」は彼の信仰仲間のうちでも顰蹙を買ったと指摘している(Hartmann, S. 758)。彼は他人の批判を甘受できなかった(Sträter, S. 84)。のみならずランゲは大部分の学生に不人気だった。「ランゲはしばしば講義を飛ばし、準備も不十分で遅れて教室にやってきた。というのも執筆に夢中になって時間を忘れるからである。二〇〇から三〇〇名いた聴講生は二〇名に減じた」(Hinrichs, S. 399)。

対するにヴォルフは人気抜群の講師であり、物腰柔らかで、ときに聴講料を免除することもあった。定時に講義を始めてきちんと纏めあげ、休講はなく、講義の準備におさおさ怠りない。明晰で流暢に講義を展開し、その論証的方法は若い学生に強い印象を与える。ある熱烈なヴォルフ・ファンの学生によれば、ヴォルフは些末な事柄にも正確な定義を与え、風が雲を吹き散らすように、そこに一点の曇りも残さなかった(Hinrichs, S. 399)。講義ノートを読みあげることもなく、いま真理を発見したかのように自由闊達に語った。対するにランゲは学生に労多き「筆耕者」の役割を求めている(Wuttke, S. 17)。

このように対照的な二人ではあるが、副学長交代のセレモニーの際に学生たちがランゲに対してとった態度は、いささか礼を失したものである。ヴトケにしたがえば事の次第は次のようである。

> 怒りのためヴォルフ贔屓の学生たちの態度は硬化した。彼らはランゲのことを「老いぼれ先生」と呼んで軽蔑した。というのもランゲは昔のギムナージウムのやり方に慣れていたので、学生を生徒と同じように扱ったからである。大学の権威がランゲの手に委ねられたことは上流階級の学生たちにとっては少なからず不愉快なことだった。彼らは副学長退任当日、大講堂からヴォルフの家まで彼に同行し、ヴォルフに万歳三唱を捧げた。これで熱くなった学生たちは帰路、新しいお偉さんに怒りを露わにした。（ヴォルフのいうところによれば）夕方、ランゲは自分のもとに音楽が届けられるのを期待してワインとケーキを手配したが、しかし彼らはランゲの家を無言でやり過ごし、ヴォルフにセレナーデを捧げた。ランゲの時代にたびたび起こった騒動の際、彼らは前副学長万歳、新副学長ランゲ去れ！と叫んだ。(Wuttke, S. 23; Hinrichs, S. 405)

二人の関係がこのようであるかぎり、ランゲの側にヴォルフに対する穏やかならぬ感情が増幅されるのは自然であろう。論争が過熱するにつれ、両陣営の間に人格的攻撃、言いがかり、議論の捏造も横行する。フランケ＝ランゲ側は学生を「スパイ」に仕立て、ヴォルフの講義内容を報告させる。嫉妬と恨みからヴォルフを裏切る学生も出現する。ヴォルフはヴォルフで神学者を小馬鹿にする態度をとり、彼らの議論を「結論捏造」と論難する。対立は大学内に留まらず、宮廷にまで波及する。宮廷人ばかりではなく軍人もこのドラマに一役割り振られる。以下、戦いの過程に立ち入る。

３　「憎しみ」の醸成

それでは「神学上の憎しみ」はどのようにピエティストのあいだで醸成されたのか。ヴォルフは数学・自然学教授としてハレ大学に招聘される。ヴォルフの講義活動がこの領域に限定されているかぎり、ピエティストとのあいだに深刻な確執はなかった。確執の素地が準備されるのは、一七〇九年、ヴォルフがその講義活動を哲学的諸学にまで拡大してのちのことである。奇しくも同じ一七〇九年、ランゲがベルリンのギムナージウムからハレ大学神学部教授に着任している。哲学者と神学者たちの摩擦が生じはじめる。

そもそも数学研究はヴォルフにとって「副業」であり、神学研究こそが本命であったことを思い起こしたい。牧師として説教の経験もある。その説教は評判が高かった。ハレ大学の神学者たちと事を構える気持ちは毛頭ないにしても、もし彼らから講義内容に関して干渉されたり、いわんや学生によって講義内容をスパイされたりするようなことがあれば、ヴォルフからすれば片腹痛い思いであっただろう。いわんやすでにヨーロッパの思想界にその名を知られたヴォルフである。自身の名声と実力は十分に自覚している。執拗な論敵に対してときに皮肉と軽蔑でかわすこともあっただろう。

ヴォルフの学位論文のテーマを思い起こしたい。「数学的方法」を重視するヴォルフからすれば、神学者たちの議論は曖昧で同義反復に満ちたものに映った。神学者の干渉に対してヴォルフは講義で彼らを「根本的知識の敵」(Hinrichs, S. 401)と呼び、その議論を「説教師の議論」(Hartmann, S. 739)と嘲笑した。こうしたことを腹に据えかねたランゲはヴォルフ批判の文章で、「宮廷顧問官ヴォルフ氏はあらゆる機会を捉えて神学者を馬鹿にし、いかにも軽蔑しきったやり方で神学者について語った」と糾弾している(Hartmann, S. 739)。

ボイテルによれば、一七一二年の『ドイツ語論理学』公刊頃から双方の雰囲気は冷えはじめる。論理学講義は王の通達によってハレ大学全学生の必須科目だった。その第一二章では「悟性によって書かれたもの、とくに聖書の解釈」が問題になっている。それによると聖書すらも人間悟性の力によって解釈されるのであって、ここからピエティストは、ヴォルフが哲学を「神学の婢」ではなくそれを拘束する指導的学問にしようとしていると受け止めたのかも知れない。遅くともこの頃ランゲは講義でヴォルフの哲学に無神論のレッテルを貼り始める。

一七一九年、『ドイツ語形而上学』が公刊される。これによってヴォルフ形而上学の全容が公然となり、双方の対立は抜き差しならぬものになる。ピエティストのヴォルフ批判は同書に集中し、ランゲは講義を通してこの書を反駁する。フランケは神学部の学生に対しヴォルフの講義を聴講しないよう警告し、従わないときにはハレ孤児院での奨学金が打ち切られた。さらにフランケは学生を内部告発者に仕立て、ヴォルフの聴講生や彼らの筆記ノートからヴォルフの無神論を証拠立てる資料を蒐集しはじめる。これはかつて彼が友人トマジウス糾弾の際にもとった方法だった。

フランケのスパイは公然と送り込まれたが、彼らは教室に入る際に祈りをはじめるので、すぐさま素性が知れた。ヴォルフも一度スパイについて、「単純さやそれ以上の何かが目から見て取れる」と語り、別の時には、「不味いスープやわずかのお金のためにスパイに使われる彼らの欺瞞」について語った(Hinrichs, S. 400)。

VI 「絞首刑に処されるべきものとして」

1 戦端

こうした背景のもとに、ヴォルフのハレ追放というカタストローフが招来される。以下、副学長退任講演以降、ヴォルフのハレ追放に至るまでの経緯の粗筋を追ってみる。

講演の翌々日（一七二一年七月一四日）、神学部長フランケはヴォルフに、神学部の同僚が吟味するため講演原稿を送るように書簡で要請する。ピエティスト vs ヴォルフの戦端が切って落とされる。「神学部が貴殿の諸命題のなかに何か不審な点を見いだしたと考えたとき、それについて率直に注意を喚起して参りました。そして一昨日行われた貴殿の副学長退任記念講演はわれわれの学部メンバー全員にだけでなく、多くの学生や何人かの外国人にとっても不審に思えました」(Gottsched, Beilagen S. 18,

Beilage, V)。

この要請をヴォルフは、学内間の論争は口頭で行うべしという学則(Hinrichs, S. 403)を楯にとってきっぱり拒絶する。ヴォルフの応答の仕方は論敵に対する彼の毅然たる、ときに挑発的で尊大な態度、さらには自信と余裕をよく伝えているので、詳しく紹介しておきたい。

> 以前、何人かの神学部学生があなた方のもとで〔中略〕あたかも私が青年に危険な教説を教えているかのように私を非難したとき、私の職務が妨げられることのないように一切の中傷に対して私の名誉を守るという当然の義務から、私は神学部の大部分のメンバーに対して次のことを望んだことを覚えています。学生たちが私にとって具合の悪いことを貴方方のもとに持ち込んだとき、私の主張についての必要な説明を与え、貴方方の誤解を正せるように口頭で私と議論を交わすということであります。しかしながらそれによって私は、｛閣下や神学部の｝同僚諸兄を私の教説の審査官に選ぶ義務を負うわけでは毛頭ありません。そのようなことは許しがたいお追従のなせる業でしょうし、私の廉直さは追従に耐えることができません。先日の私の講演がなぜ神学部のすべての同僚諸氏の反発を招いたのか、私には納得できませんし、憤激を買った点が理解できれば有り難い次第です。講演のテーマは中国人の哲学であり、私がそれを正しく理解しているかどうか、私は誰とも争うつもりはありません。自分の方がもっとよく理解していると思っている方がいらっしゃれば、それはそれで結構ですし、そのように言い立てられても私の反論を懸念するには及びません。というのも私は各人各様の見解を認めるものであり、論難の書には何らの関心も惹かれないからであります。私が講演に注ぎ込んだ省察はすべて、一語一句 、私の形而上学と倫理学に見いだされるものばかりであり、あるいはそこで彫琢を受けているものだけです。〔中略〕しかし閣下に容易にご理解いただけますように、同僚の教説がわれわれに不審に思えた場合、何よりも口頭で同僚と議論することが学則で求められているのでありますから、もしも私が講演の原稿を閣下に送り、そのことが文章による論争の発端になるようなことになれば、私はこの学則に反して行動することになるでありましょう。と申しますのも、私は自分の教説を十分に吟味し、一切の反論に対してそれらを根本的に擁護できますから、容易に理解されますように、私はあなたの批判に対して私の反論を対置することになるからであります。閣下はわれわれを拘束する学則に忠実であられますから、あなたとあなたの同僚に気がかりに思えたことを（というのもこの大学で学んでいる他の学生は重要ではありませんから）口頭で私に伝えて

いただきたい。そうすればわたくしは講演原稿を吟味し、問題となる部分についての十分な情報をあなたに与えるか、あるいは私の著書の中でそれに対応する部分をあなたにお示しするでしょう。〔中略〕もしあなたが私の講演を非難したければそうなさるがよい。私はそれを印刷させ、学者のいるあらゆる場所に送るだけのことです。彼らの見解に適う私の他の論文と同じように、この講演が彼らの賛同を得ることを私はまったく疑っておりません。私のこのまっとうな説明と善意の申し出を悪く受け取らないで頂きたいと思います。また衝突を回避するという私の深慮を、学生にとって誰かの権威が失われるきっかけを私が与えることのないようにという深慮を、是として頂きたいと思うのであります。(Gottsched, Beilagen S. 18, Beilage X)

なおこの書簡でヴォルフは自らの教説が「純粋ルター派教会」のそれと一致し、むしろピエティストがそれから逸脱している点を指摘している。その教説とは、行為は内的道徳性を有すること、意思は認識の程度に応じて善に向かってのみ努力すること、改心(Besserung)は意思からではなく悟性から始まること、たとえいかなる神が存在しなくても自然法則は存在するであろうこと等々である。ピエティストとヴォルフの対立が、宗教上の教義の対立にまで関わりうることを示唆する重要な箇所であろう。

これに対してフランケは七月二一日の書簡で、ヴォルフの側に誤解があり、原稿の法的請求をしている訳でも、口頭の議論に反対している訳でもない、と応答する。たんに「聴いた」だけの議論については確かな吟味ができないので、「友情ある連帯を築く」ためにも原稿を提出するようにと、前回の要請を丁寧に繰り返す(Gottsched, Beilagen S. 20, Beilage Y)。

しかしヴォルフはトマジウスよりは手強かった。彼は再びこれを拒絶する。これをうけてフランケは神学部の決議をとり、神学部と哲学部の告発を、可能であれば全学部の一致のもとに、王に届けようとする。哲学部はこのフランケのやり方に懐疑的であり、法学部は反対した。トマジウスは関わりを拒絶し、某教授にいたっては講演内容を評価してさえいる(Hinrichs, S. 12)。医学部の態度については伝えられていない。

ランゲもまた宮廷内にはヴォルフ・シンパが多いことを理由に、フランケのやり方に反対であった。しかし全学部の賛同が得られなかったにもかかわらず、フランケは八月一六日、大学規定を完全に無視して、ベルリンの大学上級監察官のひとりである

フォン・プリンツェン大臣宛てにヴォルフに対する神学部の訴状を発送する。フォン・プリンツェンは八月二七日に双方に調停を促し、ヴォルフはこれに従い退官講演の印刷を断念する。ちなみにフォン・プリンツェンはヴォルフ・シンパである。彼は節目節目でヴォルフの擁護に回るだろう。

２　代理戦争

こうして戦いは治まったかに見える。しかしピエティスト側はこれで矛を収めた訳ではない。むしろ次なる攻撃の機会を伺っていた。格好のチャンスが訪れる。哲学部の人事問題をめぐるゴタゴタである。ヴォルフは副学長時代に愛弟子のテューミックを助手に採用し、さらに一七二二年、彼を哲学部の員外教授に押し込もうとする。テューミックはヴォルフがもっとも信頼を寄せる弟子であった(ヴォルフ『詳解』、S. 236)。学部がこの人事に反対するやヴォルフは激しく反発し、ベルリン政府に直接働きかけることでこれを成功させる。この強引なやり方は学部の憤激を買わざるをえなかった。大学とヴォルフの関係は緊張する。政府を介して大学に影響を与えるべく画策したのだから、ヴォルフは自分の失脚には相応の責任があるというヴトケの指摘のあることを、紹介しておきたい(Wuttke, S. 24)。のちに見るようにヴォルフが政府に直接働きかけるのはこの件だけではないのである。

この人事で二人の競争相手があおりを食らう。ひとりはランゲの息子であり、父ランゲはこの人事に激しく抗議する。もう一人はヴォルフの弟子でテューミックの先輩であるダニエル・シュトレーラーである。フランケ＝ランゲ一派はこのシュトレーラーをヴォルフ攻撃の先兵に仕立て上げる。シュトレーラーはすでに三年間ヴォルフの形而上学の講義をしていたが、後輩のテューミックにさきを越されてからはヴォルフ批判に転向する。ヴォルフを「スピノザ主義」として非難するのはこのシュトレーラーに発する。シュトレーラーのヴォルフ批判には当然にもランゲの意向が働いていた。シュトレーラーはランゲによってテューミックの後釜を約束されている。ランゲの息子もヴォルフのハレ追放後、ヴォルフのポストを襲うことになるだろう。この点、ランゲのヴォルフ批判に利己的な動機が指摘されても仕方があるまい。

一七二三年三月、シュトレーラーのヴォルフ批判書『宮廷顧問官ヴォルフ氏の「神、世界、人間の精神ならびに存在一般についての理性的思考」に関する吟味』がイエーナで公刊される。これはランゲを経てブッデに至る最初のヴォルフ批判の書である。

シュトレーラーはヴォルフの論証的方法を逆手に取り、ヴォルフの議論の前提からいかに間違った結論が三段論法によって帰結するかを示そうとする。

かつての弟子の裏切り行為にヴォルフは烈火のごとく怒る。それはシュトレーラーのヴォルフ批判が学則違反だからというだけではない。ヴォルフにはシュトレーラーを逆境から救い出してやったという想いがあった。「この人物は私に恩義がある」(Beutel, S. 175)。パンのために算術を教えたのは私である、ラテン語ができないにもかかわらず修士にまで引きあげたのは、私ではなかったか。

> 私がハレに来たときシュトレーラー氏はメークラインの学校の教師で、やりくりして生活せねばならなかった。彼は私に家庭教師でパン代をもっと稼ぐことができるように、算術を教えてくれと頼み込み、私はそれに応じた。(Wolff, S. 191)

付言すれば、シュトレーラーのヴォルフ批判を単に誹謗文章と見なす訳にはいかないようである。ボイテルによれば論調は全体として客観的である(Beutel, S. 175)。シュトレーラーのヴォルフ批判の要諦は、ヴォルフが充足根拠律を誤解し、論理的規定をものそのものを特色づける必然性と見なしたという点にある。シュトレーラー書の「序論」からすると、彼は数学・論理学に自信があったようである。この書についてはまたあらためて論じられなければならない。

ともあれヴォルフは一七二三年三月一五日、短い反駁書『いわれなき中傷を退けるための最善の方法』を公刊し、大学評議会に対してシュトレーラーの講義の差し止め、ヴォルフ批判書の続編公刊の禁止、本人の処罰を求める。しかし講義は禁じられることはなかった。「学問の自由」は大学のとびきりの有力者の干渉に対しても守り抜かれた(Hinrichs, S. 407)。

これを不服としてヴォルフは、学則違反者を処罰しなかったという理由で大学当局を検察に訴えるが、管轄外ということを理由にして大学は検察の取り調べを拒絶する。ヴォルフの告発は大学の自律を脅かしかねない行為であった。

かくて三月二七日、ヴォルフは王に直訴し、シュトレーラーに対する講義禁止の措置を大学が執るように、また検事が大学に対する審査を貫徹するように、さらに神学部教授がヴォルフ批判を中止するように、要請する。

一〇日後の四月五日、王より次のような勅令が下る。そこにはシュトレーラーがヴ

ォルフ形而上学批判を出版したのは甚だ遺憾であること、ヴォルフのこれまでの研鑽と、多くの学生をハレに呼び寄せた彼の功績の故に、ヴォルフを擁護することは大学にとって甚だ重要な関心事であることが語られている。さらに、

> したがって余は、もっと危険な帰結を避けるために、炎になりかけている灰の中の火花を消し止めることが必要だと考え、寛大仁愛の念をもってかつ真摯に、副学長によって発布されヴォルフ教授に向けて公表された査問論文のさらなる印刷の禁止の延長を要求する。またこの論文の著者であるシュトレーラー修士に対してはなおのこと、彼が棘のある言葉を用い、自らの学識に関して学恩のあることを彼自身が認める名誉輝くかつての師である人物に対して礼節を一切無視しているがために、この件に関する執筆続行の、かつ論文や講義におけるヴォルフ教授の著書に対する酷評の禁止を、違反した場合には多額の罰金と学位剥奪に値するものとして、全面的に要求する。(Gottsched, Beilagen S. 30, Beilage c)

さらに勅令は、ヴォルフは彼に負わされた疑いを認めた訳ではない、もしそれらの嫌疑が実際に彼の書物にかけられるのなら、学則に従って彼は口頭で審問されるべきであり、必要とあれば王に訴え出ればよい。しかしひとりの教授を公に非難し、それによって他の教授連も一括りにして非難するような大胆さを若輩者に与えることは許されない云々、と続く。おそらくこの勅令を実際に執筆したのはフォン・プリンツェンだろう。

こうして対シュトレーラー戦にヴォルフは全面的に勝利する。しかしこの勅令の最後に、

> さらに同僚間のさらなる衝突や大学にとって不利な騒動を予防するために、大学教授の誰もこの問題について直接的であれ間接的であれ同僚間で語ってはならない。違反した場合には年収の一部剥奪に値するものとして必ず罰せられるであろう。しかしながら大学のあるものが理由あって、かつ思惑抜きで、あることを注意喚起すべきであると考えた場合、そのものは直ちにわれわれのもとに申し出、その格別の懸念を申し立てよ。云々。ベルリン、一七二三年、四月五日(Gottsched, Beilagen S. 30, Beilage c)

という一節がある。次に見るように、これが闘争の新たな展開の火口になる。

3　委員会の成立

シュトレーラーによる代理戦争が進行している間、神学部ではヴォルフに対する独自の作戦が準備されつつあった。一七二二年、反ヴォルフ派はヴォルフの著作を分担して読んで問題点を摘出することに決定する。このアイディアを提供したのはトマジウスである(Wolff, S.193)。ヴォルフの主著『ドイツ語形而上学』の担当はランゲに託される。こうして纏められた文章が「枢密顧問官かつ教授ヴォルフ氏の形而上学についてのハレ大学神学部の注解」（以下「神学部注解」）として、一七二三年五月二一日、さきの四月五日勅令の結部にあった文言を根拠に全大学の名前でベルリンに送られる。しかしこの告発文は神学部が期待したような全大学の一致は得られなかった。法学部と医学部は何の態度も示していない。哲学部の内部でさえ意見は割れていたが、当時のピエティストの学部長が独断でヴォルフ批判の文章をベルリンに提出する。

同年五月三一日、ベルリン政府はこの「神学部注解」をヴォルフに送り彼の意見を求める。その際以下の文章が添付されていた。

> 〔中略〕ハレ大学の神学部ならびに哲学部が貴殿の形而上学に関してどのような注解を加えたかは添付の原本から十分に理解されることであろう。われわれはこれらの注解をまず貴殿に送って回答と説明を求めるのが適切かつ必要なことと考えている。その説明と回答を貴殿はきわめて有用な原本と一緒に｛われわれのもとに｝送らねばならない、われわれは｛それが着いたときに｝そのような注解の吟味に詳しく立ち入ることに決定しているし、適切な状況に応じてさらなる措置を下すつもりである。云々。ベルリン、一七二三年、五月三一日(Gottsched, Beilagen S. 32, Beilage e)

ヴォルフはこの「神学部注解」に対して「ハレ神学部の注解に対する根本的回答」（以下「根本的回答」）を著し、これを、一七二三年八月にランゲに対抗して執筆された「知恵の連関と運命の必然性の繋がりとの相違」の付録として一緒に同年内閣に送る。こうしてランゲの批判とこれに対するヴォルフの応答が揃う。なお「神学部注解」および「根本的回答」の抄録はハルトマンで読むことができる(Hartmann, 1737, S. 730 ff)。抄録の内容は正確である。現代ではこの「神学部注解」と「根本的回答」はエコール編ヴォルフ全集第一部第一七巻　（一九八〇年）に納められている。

なおうえの「相違」論文は一七二四年にハレで公刊される。現代ではエコールの詳

細な解説と共に『形而上学小論集』（ヴォルフ全集第二部第九巻）に纏められている。ここに納められているヴォルフの二つのスピノザ批判論文はドイツ初期啓蒙主義におけるスピノザ理解を窺ううえできわめて貴重な資料である。

一七二三年一〇月二九日、ベルリンの内閣は親ヴォルフ派のルター主義者ラインベックを中心に委員会を設置し、ヴォルフの教説に問題点があるかどうか審査を委ねる。フォン・プリンツェンはこの件が漏れないように、またヴォルフがハレを去って他の領邦に活動の場を移して学生数が減り大学に損害を与えることのないように、委員たちに秘密の厳守を求める(Beutel, S. 185)。他方、ラインベックは次の三箇条に関して審査を計画する。ひとつは、ヴォルフは彼に帰せられていることを実際に教えたのか、次に、彼は誤った教説を教えたのか、最後にこの教説は宗教にとって有害か、である(Hinrichs, S. 415; Beutel, S. 186)。

４　王の一喝

しかしながら委員会が結成された時点ですでに事態は委員会の思惑とは異なった方向で進展しつつあった。当初、ラインベックは事態を穏便にすまそうと考えている。委員会結成前からランゲに調停を持ちかけている。しかしながらランゲの態度は頑なであった。またフランケは別の方法で事態の解決を図ろうとしていた。彼らは設置された委員会では親ヴォルフ派の影響が強くて自分たちの目的が達成されないのを予想し、王に直接訴えることを決めていたのである。ラインベックもフォン・プリンツェンもヴォルフ・シンパであってみればこの状況判断は適切であっただろう。この判断には過去の成功例が影響している。トマジウスに対するフランケの糾弾である。かつてフランケは、二人のピエティスト派の将軍を送り込むことでフリードリヒ王に影響を与え、トマジウスの懲戒に成功している。王はフランケの訴えに過剰に反応し、講義の制限が求められたにすぎないのに危うくトマジウスのハレ追放にまで至りかけた。ボイテルによれば、フランケとランゲは王への直訴に際してもこの王の過剰反応を念頭においていたであろうという(Beutel, S. 188)。こうして「反ヴォルフ闘争の最終局面」が始まる(Hinrichs, S. 415)。委員会の与り知らぬところで、もちろんヴォルフの関知しえないところで、事態は進行していく。

王への直訴のきっかけはまたまた人事問題であった。一七二三年八月、ヴォルフの親しい友人であり彼の味方でもあった哲学部所属の神学者ハイネキウスがオランダ

の大学に転出することになる。九月、その空きポストにヴォルフは哲学部の反対を押し切って、愛弟子テューミックを正教授として押し込もうとする。この人事に上級学部の権益に対する下級学部による侵犯を見る論者もいる(Holloran, S. 373)。それによると哲学部には二つの役割が期待されていた。ひとつは学生にとっての上級学部への準備階梯という役割だが、いまひとつは、哲学部が上級学部教授のお気に入りの若者のキャリアの出発点になるという役割である。上級学部の教授の多くはそのキャリアを哲学部から開始している。この点からすれば、神学者の占めていたポストを哲学者で埋めようとするヴォルフの画策は、明らかに上級学部の優越性と権益を脅かすものだった。しかしフォン・プリンツェンの援護のもと、ヴォルフはこの人事を成功させる。

一〇月一六日、ハレ大学の神学者たちはこの件について「覚え書き」を作成して、フランケの手紙とともに王に送る。王への直訴である。ここにはフランケに対する王の個人的信頼関係への期待があったとされる。届けたのは二人のピエティスト派の将軍である(Beutel, S.188)。「覚え書き」には次のような文面がある。

> 教授であり宮廷顧問官であるヴォルフ氏は当大学で公の著述と講義において、自然宗教と、神の言葉によって啓示された宗教とにひどく反する教説を教えている。それらの教説は大学で学んでいる若者たちにこれまで甚大な悪影響を与えている。またことに軽率な人々を無神論に誤り導きかねないので、外国人のもとで大学はこれらの教説の故に深刻な不評に晒されている。(Beutel, S. 187, Fußnote 218)

さらにこの「覚え書き」には、ヴォルフは本来そのために彼が招聘された自然学関係の講義に専念すべきであって、形而上学講義や倫理学講義は控えるべきである。ヴォルフとテューミックがこのまま活動を続けるなら、神学部は将来敬虔な牧師を世に送る出すことができなくなるだろう、と付け加えられていた。

この「覚え書き」はもっと厳しい表現でフォン・プリンツェンにも送られる。そこではヴォルフは端的に無神論者と断じられている。テューミックは精神のないエピゴーネンでしかなく、師匠のヴォルフの教説以外には何も哲学について理解していないと酷評される。これらに加えて、神学部の望む委員会を結成するように王に働きかけてほしい旨の要請が添えられていた。さらに自分たちの行為が情動や企みではなく、純粋無垢な動機に発するものであることを宣誓するのを神学者たちは忘れなかった

(Beutel, S. 188)。

かくて事態は急転直下、カタストローフに向かう。一〇月二二日、王はこの覚え書きへの返書のなかで、ヴォルフとテューミックの教説についてフランケに説明を求める。こうして王の介入が始まる。フランケの思惑が奏効したようである。王に応えてフランケは、ヴォルフの哲学にしたがえば運命論に至ると警告する。「覚え書き」を届けた二人の将軍もこの点に狙いを定めて王に説明していたであろう。運命論に従えば忠誠心のない軍人も反抗的な兵士も自らの行動を運命によって正当化できる、と(Hinrichs, S. 416)。おそらくこれ以上に軍人王の警戒心を掻き立てる表現は考えられない。次のようなもっともらしい解釈も伝えられている。「単純素朴な教育を受けた宮廷人たちは、ヴォルフの教説によれば人間に生じた一切は（したがって兵の脱走も）必然的に生じねばならないという決定論に至ると瞞着されることで、一〇人の著名な哲学者よりは一人のポツダム人の方が重要であるフリードリヒ王のような王をして危険な人物を直ちに追放するように容易に決断せしめることができた」(Beutel, S. 189, Fußnote 237)。

一〇月二六日午前、王の手紙がフランケに届けられる。同日夕方、これに応えてフランケが王に書簡を認める。この書簡にヴォルフのハレ追放に関わる決定的告発が記載されていたであろうと推測されるが、しかしボイテルによればこの書簡は所在不明である。「したがってどのような情報によってフランケはヴォルフ追放に王を動かしたのかという、歴史家の好奇心は満たされない」(Beutel, S. 190)。しかしプロローグで紹介した、またすぐ後に全文を紹介する、ヴォルフに対する勅令から大筋は推察できるだろう。

一一月八日、王はヴォルフの誤った教説に関して「不興」を感じている旨の、またテューミックの採用を取り消す旨の書簡をフランケに送る。自筆の追伸で王は「あのヴォルフがかくも神を蔑するものであるとは知らなかった」と憤怒をぶちまけている。しかし知らなかったのだから、「余の責任ではない」(Beutel, S. 191)。

ここから窺えるのは、親ヴォルフ派のフォン・プリンツェンが事態を正確に王に伝えていなかった可能性である(Holloran, S. 368)。少なくともヴォルフに対する王のこれまでの寵愛は、彼のフィルターを通したヴォルフ像に向けられたものだっただろう。いまそのフィルターが外されたのだ。

同日、王はヴォルフに対する処断をフォン・プリンツェンを介さないで自筆で下す。

そこには、自分は騙されていたこと、ヴォルフは啓示宗教に反する教説を教えているが、自分はそれを認めることができない、絞首刑に値するものとして四八時間以内にハレを去らねばならない、とあった。これをうけてフォン・プリンツェンは大学に対する命令を仕上げる。その際彼はヴォルフに対する決定が王「御自ら下された」ものであることを付け加える(Hinrichs, S. 417)。

一一月一二日、こうしてヴォルフのハレ追放の決定を告げる勅令がヴォルフに届けられた。その場面については既にプロローグで紹介したとおりである。勅令は詳しくは以下の通りである。

> ハレ大学の教授であるヴォルフは、公の著作や講義において神の言葉に啓示された宗教に背く教説を講義していて、余がこの事態をもはや看過すべきではなく、ヴォルフがその教授職を王の手によって完全に解かれこれ以上講義を許すべきではないとの告発があった。ここに余は、ヴォルフ教授をもはや大学で許容すべきでも講義が認められるべきでもないという命令を諸氏に下達せんと欲する。諸氏はヴォルフに、この命令を受け取ってから四八時間以内にハレおよびその他の王の領地を絞首刑に値するものとして去るべきである旨伝えねばならない。ベルリン、一七二三年一一月八日　フリードリヒ・ヴィルヘルム(Gottsched, Beylagen S. 33, Beylage g)

おそらく事態の推移を楽観していたであろうヴォルフにとってこの勅令はまさしく青天の霹靂であったに違いない。『ドイツ語政治学』（一七二一年）でヴォルフは君主制の長所を迅速果断な決断に求めていたが(第二五七節)、このたびヴォルフはそれを身もって体験したことになる。

他方、後日、ランゲはそのときの感慨をラテン語であけすけにこう述べている。

> 落城！ヴォルフ哲学落城セリ、王家ノ権威ニヨッテ城壁ヲ穿タレテ崩レ落チタリ。(Hartmann, S. 893)

ともあれピエティストはかろうじて最終局面でヴォルフに勝利した。フォン・プリンツェンのメモの余白には、委員会はヴォルフとテューミックの容疑を晴らすはずだったが、王によって無実な二人が追放されたとあった(Holloran, S. 372)。議論によって

ではなく世俗権力によってのみ勝利できたことに、当時のプロイセン国家に対するピエティストの強い影響力を見ることができるだろう。と同時にそれは世俗権力を頼らざるをえないピエティストの限界を露呈させるものでもあった。その意味でこの勝利はピエティストの影響力の頂点を示すと同時に、その没落と変質の始まりでもあったとはいえるだろう(Schrader, S. 211)。

VII　対決

それではさきの「神学部注解」と「根本的回答」ではどのような応酬が繰り広げられたのだろうか。これらはヴォルフのハレ追放に実質的にはいささかも影響していない。しかしヴォルフとランゲの対立の思想的な内実、あるいはまた人間的な側面を窺い知るには必須の資料である。追放の顛末をいま少し辿る前に、この点を概観しておくべきだろう。以下では「注解」と「回答」からいくつかの論点を紹介する。

1　形而上学

「神学部注解」では神概念、充足理由律、世界概念、行為の自由、自然学、心身問題等、ヴォルフ哲学の主要テーマが多岐にわたって批判されている。既述のように総じてランゲのヴォルフ批判に対する研究者の評価は芳しくない。しかし最近の研究者の間にはランゲのヴォルフ批判の正当性を擁護するものも現れた。先述のように、ビアンコがその一人であって、それによると自由の問題に関してランゲのヴォルフ批判の影響はホフマン、クルージウス、カントまで及んでいる(Bianco, S. 132)。以下ではまずこの問題から確認する。

ランゲはものの因果的連関に世界の定義を求めるヴォルフに対して、この定義からは「機械論的運命論と必然性」が帰着すると批判する(Hartmann, S. 732)。対してヴォルフは、「そのような連関を認めなければ自然学や道徳論は崩壊する」と反論する。というのも、「人間が何かをなそうと欲する場合、先行する彼の状態において、彼がそれを欲したことがいかに可能であったかが理性的人間であればそこから理解できる何かがつねに見いだされる訳ではないからである」(Hartmann, S. 744)。

ここには「自由」をめぐる双方の哲学的立場の相違が集約されている。この点はランゲの別の議論から明らかである。そこでランゲは、「著者｛ヴォルフ｝は運命論的必然性を、人間精神がそこあるものとしての自由原因 causae liberae ならびに自由起動

者 libere agentes にまで拡大するから、彼にあっては自発的で自由な運動や行為、自由意思的運動は、心が積極的に実現し充足するものではなく、それによって意思が機械の作動によって受動的に充足されるようなものでしかない」という(Hartman, S. 733)。この「自由原因」概念はまさに、後年クルージウスがライプニッツならびにヴォルフの自由論に対置させた概念に他ならない（山本、二〇一〇年、二五三頁以下）。この自由論はカントの形而上学的自由論にも通じる。ヴォルフにおける自由概念を「機械の作動」に置き換える論法は、カントによる「自動的に運動する回転串焼き機」の比喩を連想させないだろうか(カント『実践理性批判』、全集第七巻二六四頁、Ak., V, S. 97)。

２　心身問題

心身問題についての双方のやり取りにも注目したい。ランゲによれば、「ヴォルフが仮説をスピノザと共有していることはただちに証明される。」 このことは予定調和説の主要論点に言及するだけで十分である。「この予定調和説によって、心は身体を動かすことができず、口は心の理性的な介入なしに一切を語ることができる」と指摘する(Hartmann, S. 738)。

これに対してヴォルフはまず、スピノザの名前を持ち出すランゲの論法の悪意を批判する。「私に対する攻撃の対象であり私がライプニッツと共有する教説が、スピノザに由来すると読むものは、理解力のある人であればその単純さを、そこに隠されている悪意を嘲笑するだろうし、私を傷つけようとする企みを憂うだろう」(Hartmann, S. 754)。ヴォルフによれば「予定調和説では心身それぞれが独立に作用する異なった二つの実体であることが前提される」。対するにスピノザでは双方は一つの「実体」である(Hartmann, S. 755)。ちなみにランゲとの論争以降、ヴォルフはスピノザ批判をことあるごとに繰り返し、自身の哲学とスピノザ哲学の差異化を強調するようになる。ヴォルフのスピノザ論についてはまた稿をあらためて論じられなければならないだろう。

注目したいのは、この時点ではヴォルフは「物理影響説」に対する「予定調和説」の優位性を確信している点である(Hartmann, S. 748, 752, 755, 756)。このことはライプニッツとのヴォルフの距離の近さを物語っている。ランゲの批判に対する応答のなかでヴォルフは一〇回近くも憚ることなくライプニッツに言及している。しかしこの論争

ののち、予定調和説に対するヴォルフの評価はより慎重になる。予定調和説は「仮説」の地位に後退し、『経験的心理学』（一七三二年）、『合理的心理学』（一七三七年）では心身問題は科学的説明の問題と形而上学的説明の問題とに注意深く分けて議論されるようになる。これはきわめて現代的な視点であることを強調しておいてよい（山本、二〇一〇年、三七四頁以下）。

３　結論捏造屋

次に双方の応酬の仕方にも注目しておきたい。ヴォルフはランゲの批判の仕方に対する憤りあるいは苛立ちを隠さない。「タエ重ナル忍耐ハツイニハ狂気ニ至ル」(Hartmann, S. 758)。既に紹介したように、ヴォルフは『ドイツ語形而上学』第一序論結部で読者に向かって、言葉を「意図的に曲解」して「不合理で危険な見解を私に押しつけないような誠実さを望む」と述べていた。「神学部注解」に対するヴォルフの反論は、この「意図的」な「曲解」に向けられる。ヴォルフはこれを「結論捏造」、あるいは「言いがかり」、「異端誣告者」とも呼ぶ。これらの概念は様々な文脈で用いられるが、要は、主張してもいないことを「意図的に曲解」して言いがかりをつける論法を指すようである。

第一答弁では、神の存在証明の「議論」をヴォルフが否定したという批判に対してヴォルフは、「論証」の妥当性を批判したのであって、結論を否定したのではないと反論している。ヴォルフは論理学に対するランゲの無知をあげつらう。ヴォルフによれば、ある議論が正しい論証であるか否かの吟味は熟達した学者の仕事であるが、ランゲの『精神の治癒』には論証の妥当性が判定される規則が含まれていない。したがって彼をそのような学者と見なすことはできない(Hartmann, S. 741)。ヴォルフの酷評によれば、この著書には「奇妙な処方箋がどっさりある」(Hartmann, S. 745)。

またヴォルフによれば、ある人を「異端」として糾弾するには、「結論」ではなく「テーゼ」を批判しなければならないのをランゲは知らない。「愛すべきこの人物はなぜいつも結論と戦うのか」(Hartmann, S. 743)。「根拠を攻撃するのではなく結論と戦う人は喧嘩好きの学者と呼ばれる」(Hartmann, S. 743)。

また第一一答弁では、ヴォルフの自然学理解に対するランゲの「言いがかり」を三箇条にわたって列挙し、逐一反論している。この答弁の冒頭でヴォルフは、「人ソレゾレノ職分ヲ守ルベシ」とランゲを皮肉る。「数学的諸原理について何も理解してい

ない人物が、数学的諸原理ぬきには何も理解できない問題について何を語ろうとするのだろうか」(Hartmann, S. 745)。

４　非難合戦

ランゲによる異端誣告的議論の最たるものは、ヴォルフの哲学を「スピノザ主義」と同日に論じることにある。ランゲは少なくとも三度にわたりヴォルフの哲学をスピノザに結びつけて論じている(Hartmann, S. 734, 738, 739)。ヴォルフの議論に「機械論的運命論」、「運命論的必然性」を指摘するのも同じ論法であろう。「神学部注解」の最後の方でも、ヴォルフが「宗教や真の道徳にとって実に危険な諸原理」を公にすることで「ドイツ人の憤激」を買い、フリードリヒ大学｛ハレ大学｝に不利益を招いただけではなく、それによって人々が「スピノザ主義」に誤り導かれると非難している(Hartmann, S. 738)。ヴォルフ哲学の「危険な原理」によるハレ大学生や大学そのものに対する悪しき影響が強調される(Hartmann, S. 738)。

この類いの批判になるとランゲの筆法は激しさをまし、理論的対立というよりは人格的対立の様相を帯びる。「神学部注解」の最後の方では神学者に対するヴォルフの尊大不遜な態度が指弾され、ヴォルフの人格に対する批判がこれに重なる(Hartmann, S. 739)。さらにヴォルフに対する批判がこまごまとくり拡げられる。曰く、ヴォルフの講義を聴講してのち学生たちは敬神の念を失った。曰く、ヴォルフは神学者を軽蔑し､何かを馬鹿にするとき、それは「神学者の議論」であるという。曰く、ヴォルフはハレ内外の学者の悪口を言うことによって自分の名声を築いた。曰く、死についてのヴォルフの講義によって聴講生は死者復活の信仰を失った。曰く、自然学における生殖についての講義は聴講生の不快を招いた。曰く、シュトレーラー本の刊行後ヴォルフは異なった意見の持ち主に辛辣過酷になった。曰く、彼は激しい情動の持ち主であった等々(Hartmann, S. 739)。「神学部注解」の最後では、「公正な人々が、彼の形而上学の本来の意味に対してヴォルフの回答（彼は決してすることができないであろうが）を対置させるならば、神学教授諸氏は、彼が率直な撤回によってしかその誤謬から解放されないことを心底確信するであろう」と結ばれる(Hartmann, S. 740)。

対するにヴォルフは、批判に対して理論的に応答するというより、対人論法的に相手の批判の悪しき意図を糾弾する。論理学や自然学についてランゲの無知を皮肉り、無神論者という批判に対しては、ハレ孤児院の教員を無神論から救ったのは自分であ

るという(Hartmann, S. 755)。個人攻撃に対してはパリやローマでの高い評価を突きつけ、国外からの招聘があることも誇る(Hartmann, S. 754)。学生や大学に対して不利益を及ぼしたという批判に対しては、海外における自分の著作に対する高い評価、とくにジェスイットの間での評価を対置している。総じてこの応答にあってヴォルフはジェスイットに対して好意を示している。ランゲのライプニッツ批判に対して、「ジェスイットもライプニッツ氏に対してかくも悪質ではなかった。彼に対する彼等の振る舞いの誠実さは誉められねばならない」という(Hartmann, S. 755)。また「生殖」についての講義批判に関しては、「私が述べたことはすべての医学書に書いてある」とにべもなく受け流している(Hartmann, S. 758)。ついには自分を理解しようとしないランゲに業を煮やし、まともな批判ができないのなら「私の学生のひとりを代わりにたてる、そうすれば私は時間を無駄にするには及ばない」と切り捨てる(Hartmann, S. 759)。

VIII　収束に向けて

１　局面の展開

ヴォルフのハレ追放を主導したのはフランケである。彼にはヴォルフに対する個人的な思惑はなかっただろう。彼らは一時は友好的な協力関係にさえあった。フランケは宗教的確信にしたがって行動し、ヴォルフのハレ追放に神の摂理を見ている。イエーナのピエティストであるブッデ宛書簡（一七二三年一一月一七日）でフランケは、ヴォルフの講義を数学と自然学に制限する以上のことを王に求めなかったが、予想に反してハレ追放の命令が下されたと書いている。「これによってわれわれは少なからず動揺したが、ヴォルフの教説のこれまでの悪評と悪影響は当地だけではなく遠く外国にまでよく知られていて、久しくそれを神に対してひどく嘆かわしく思わざるをえなかったので、われわれはヴォルフの追放に恐れと戦きをもって神の裁定以外のものをみることはできない」(Hinrichs, S. 418)。

王に対してヴォルフを取りなす動きもあったようであるが、フランケは熟考のすえ、これを拒絶している。「ヴォルフを当地に留めるよりは行かせた方がよい、彼は考えを変えなかったし、変えることもないだろう」(Hinrichs, S. 419)。

他方、ヴォルフ自身はピエティストとの論争に哲学的意味を見いだしていない。彼にとって「ハレの運命」はピエティストの中傷とそれに扇動された将軍たちによって押しつけられたものであった。ヴォルフは自分をランゲの敵愾心の犠牲者とみている

(Beutel, S. 193)。

ヴォルフ追放後もヴォルフに対するピエティストの戦いは続く。ハレ大学神学部はドイツの大学にヴォルフ哲学の危険性について警告を喚起する。それもあってかマールブルク大学ではヴォルフの受け入れについて反対意見もあった。「マールブルクでは教授たちがヴォルフの採用に反対したので、これら教授連を黙らせるには二度に及ぶカール方伯のほとんど脅迫まがいの命令を必要とした。カール方伯はヴォルフを妨害することを禁固刑でもって禁じ、彼を差別扱いするいかなる機会も認めなかった」(Wuttke, S. 32)。

プロイセン諸州の大学ではヴォルフ派とピエティストとの激しい応酬が続き、ケーニヒスベルク大学の私講師フィッシャーのように、当局の意向に逆らってヴォルフ哲学を講じ追放と迫害の憂き目を見た哲学者も現れる。ケーニヒスベルク大学ではヴォルフ主義者は教授になれなかった。

しかし徐々に事態はヴォルフ派にとって有利に推移しはじめる。一七二六年、ラインベックはヴォルフとランゲ双方の応酬の文章（「注解」と「回答」）を読んだうえ、ハレ大学神学部はヴォルフに不正を働いたと確信するに至る。彼はランゲに対して、ヴォルフは正しく理解されていない、ヴォルフ自身が排斥するような命題がヴォルフに帰せられている、ヴォルフの体系が単なる憎しみと個人的な思惑から攻撃されている等、九箇条からなる問題点を指摘している(Hinrichs, S. 420)。

三〇年代初めにはハレでもヴォルフ哲学の影響を受けた若い私講師が活躍しはじめている。後の美学者アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンの兄ジークムント・ヤーコプ・バウムガルテンもこの頃ヴォルフ主義の神学者としてハレで活躍する。

一七三三年、ヴォルフがライプニッツに次いでフランス・アカデミーの海外メンバーに選ばれたことは、ヴォルフ派にとって有利に働いただろう。しかし何よりもヴォルフに対する王の寵愛を取り戻し、彼のハレ帰還を実現しようとする、ラインベックやマントイフェルたち宮廷ヴォルフ派の活躍がある。マントイフェルは皇太子つまり後のフリードリヒ大王に接近し、ヴォルフ哲学についての関心を皇太子のうちに高める。皇太子は父のフリードリヒ王が亡くなるや、直ちにヴォルフのハレ帰還の実現に向けて動きだすことになるだろう。なおマントイフェルはザクセン宮廷の「秘密エージェント」(Hinrichs, S. 430)だったという指摘もある。

宮廷に対するピエティストの影響力も後退する。フランケ既に亡く、彼を除いて宮

廷社会に影響力を発揮しうる人物はピエティスト側には見当たらない。父の後を継いだ息子フランケに父ほどの人格的迫力もなく、宮廷で皇太子にさんざん嘲弄される始末である。ピエティストは皇太子を敵に回したのである。

皇太子、ラインベック、マントイフェルらがヴォルフのハレ帰還を王に説得する。王はその周囲を皇太子をはじめヴォルフ・シンパの宮廷人に囲まれていて、彼らと、強硬なランゲとのあいだで、最後までヴォルフに対する態度が揺れていた。しかしそのフリードリヒ王の気持ちも徐々にヴォルフに傾斜しはじめる。

こうした状況に対抗してランゲは一七三六年四月、自ら宮廷に乗り込みヴォルフ批判を王に吹き込む。ランゲ最後の懸命の反撃である。王はこれに動かされて、神学者になろうとする学生は二年間ハレ大学で学ぶべしという勅令がいったんは下る。このランゲの反動的策動に宮廷ヴォルフ派は怒り心頭に発する。一七三六年四月二〇日、皇太子はマントイフェルに次のように手紙を認めている。

> 無知と中傷がヴォルフを攻撃して以来、私はかくもヴォルフに激しく同情的であったことはない。なんだって、理性の使用の断念だと。無知というもっとも法外で馬鹿げた先入見を信じるというのか。われわれを動物から分かつ唯一のものの使用を自由な決断によって断念するのか。〔中略〕私は十分な根拠をもって信じるが、ランゲは愚か者だ。なぜなら彼は理性的に思考しないし、理性的に思考するのを人類に禁じるからである。この畜生は語る栄誉に値しない。(Hinrichs, S. 437)

なおヴォルフは大王に会うチャンスはあったが、結局相まみえることはなかったようである(Droysen, 1910)。

こうした状況にあって一七三六年四月二三日、ヴォルフ・シンパ派のグルムコワ将軍が局面打開に動く。王の食事の席に同席していたランゲに対して、将軍はヴォルフ迫害が敵を愛するというキリスト教の精神に背くとして、次のようにランゲを難詰する。仮にヴォルフがこの食事の席にいて、ランゲは偽物の信者であり、自分の息子を哲学教授にするために私を追放したと言い募ったら、あなたはヴォルフが自分を迫害したというだろう。しかしヴォルフ氏はそのようなことを何もしていないのだ、と。そしてランゲとヴォルフの見解をもう一度提出させることを王に提案する。王はこれを受け入れる。ランゲは蒼惶としてハレに戻らざるをえなかった(Hinrichs, S. 438)。

こうして一七三六年六月五日、新しい委員会が結成される。ヴォルフの教説に無神論は見いだされないことが結論され、論争を止めることが勧告される。ランゲは沈黙を余儀なくされる。同年冬学期、ハレ大学で再びヴォルフ哲学の講義が開始される。

２　ハレ帰還

ヴォルフに対する王の態度は最後まで揺れていたようであるが、皇太子ら宮廷ヴォルフ派の影響もあって、最終的にはヴォルフを容認する。一七三九年三月七日、神学研究について勅令が下され、学生は哲学と論理学に関してヴォルフの哲学を範にとらねばならないとされる。四月、ヴォルフは『普遍的実践哲学』第二巻を王に献呈し、王はヴォルフにフランクフルト･アン・デア・オーデル大学のポストを提示するが、ヴォルフはこれを断る。次いで一〇月、ハレ大学へ招聘されるが、これも断る。一七四〇年四月三〇日、ヴォルフは『自然法』第一巻を皇太子に献呈、皇太子はこれに丁重な礼状を認める。翌五月、フリードリヒ王死去。新王はただちにラインベックを介してヴォルフのハレ大学招聘の話を進め、九月一〇日、最終的にヴォルフはハレ招聘を受け入れる。ヴォルフの著作の販売と利用を禁じた一七二七年五月一八日の勅令が廃止される。

一七四〇年、ヴォルフはマールブルクを発ち、一二月六日夕方ハレに着く。翌日、ランゲと和解する。この間の情景を活写している文章が残されている。いささかながいが全文を紹介しておきたい。ヴォルフのハレ追放事件顛末の第二のクライマックスと呼んでよいだろう。

> 一七四〇年四月二四日のザクセン、ハレ、ヴァイセンゼー地方の地方紙には手書きの記録から以下のことが報告されている。一七四〇年一二月六日夕、午後四時から五時のあいだ、待ち望まれた副大臣かつ枢密顧問官のクリスティアン・ヴォルフが威風堂々とハレに到着した。ドイツ谷（ハレから二時間ばかりの村）では午前中に昼食の準備がなされていて、ヴォルフはそこで土地の何人かの友人にもてなしを受けた。そこから彼はハレからさほど遠くないところにあるシュレタウ村に赴き、そこで非常に多くの学生たちに万歳三唱の繰り返しでもって迎えられた。彼らのあるものは儀装馬車で、あるものは馬で、あるものは徒歩でやってきたが、名士のかなりの部分も混じっていた。枢密顧問はそこで何杯かのコーヒを所望し、まもなく三〇分後には旅を終えようとした。彼は石橋を渡り、麦わら広場と旧市場経由でラン

ク街通り（いまではラニッシュ通り）を抜け、ベルリン、市場経由でトマス館の後ろのウルリッヒ大通りに入った｛この通りの名称は現代のハレにも残されている｝。列に付き従う人々はひっきりなしに万歳を叫び、大勢の市民や学生たちが群れ集っていた。ヴォルフの護衛は彼の人物に合わせて華麗であった。三人の御者が先頭になり、郵便ラッパを携えた学生が後続の隊列の先導者としてこれに従った。御者たちはラッパをたえず吹き鳴らして周囲の観客に祝福の歓声をあげるように鼓舞した。次いで馬に乗った五〇人以上の学生たちが整然と列をなして続いた。このあとに枢密顧問の四頭立ての儀装馬車が続いた。車中には顧問官と彼の妻がいた。すぐ後ろには四頭立ての二台の馬車が続き、なかにはヴォルフに随伴してきたマールブルクからの学生たちが乗っていた。続いて当地の市民が多くの馬車に乗って従い、二人の名士市民が列全体の殿をつとめた。枢密顧問がマルカー通りに足を踏み入れたとき、枢密顧問ハイネックスの自宅では法学部が学位試験をしていた。博士候補者であるハイネックスの子息がヴォルフに挨拶のために遣わされてやってきた。枢密顧問ヴォルフ氏がウルリッヒ大通りに達するやいなや、トマジウス館の前に陣取っていた楽隊がトランペットとティンパニーを奏で、甘美なセレナードで行事を締めくくった。誰もヴォルフの到着に不満を感じるものはいなかったが、ランゲは例外であった。彼は憤懣の念を隠すために一日中街から逃げていた。これに対して学生と市民の喜びは非常に大きく、今上陛下｛フリードリヒ大王｝の戴冠式以来久しく味わったことのない喜びであった。一晩中清らかな喜びの楽曲が流れ、各人は繰り返し祝賀の歌を口ずさんだ。一言でいえば、喜びが各人の目に溢れ、あたかもかつて嫉妬のため大学から追放されたこの人物の到着に格別のよきことが約束されているかのようだった。同月七日、ときの副学長のユンカー博士の取り計らいで、副大臣ヴォルフと神学者ランゲがヴォルフの宿舎でユンカー博士同席のもとで握手を交わし、過去のことは水に流し、今後は最善の友になることを約束した。(Wolff, S. 167)

なおうえの文中で「嫉妬」という表現が使われているが、ここからヴォルフがランゲの嫉妬心の犠牲になったというのが巷間一般の認識だったことが窺えるだろう。

エピローグ

1　政治的側面

以上がヴォルフのハレ追放の顛末である。ヴォルフ vs ピエティストの論争にはもちろん思想上の大義がある。しかしこの大義を担い声高に叫ぶのは生臭い人間たちであ

る。双方の論争を駆動したのはこれら大義の担い手たちの様々な思惑、工作、情念、利己心、強烈な個性であったようだ。ヴォルフ自身のいうように、彼はこれらの情念の「犠牲者」だったかも知れないが、しかしヴォルフの強烈な自負心、妥協を知らない頑固な性格によって、一層紛糾の度が強められたとはいえるだろう。ヴォルフはかつてライプニッツから同僚に対してもっと謙虚であるように忠告を受けたことがある(Schrader, S. 180)。トマジウスを軽侮したライプニッツ宛書簡もある(Schrader, S. 196)。彼はトマジウスをソッツィーニ派として告発したこともある(Holloran, S. 365)。

さらにこれらの事情に上級学部と下級学部の関係、大学とベルリン政府の関係、大学人と宮廷人との様々な個人的な繋がりが絡んで、多様な力のヴェクトルの場が作りだされた。ヴォルフ問題は思想的であるとともに、学内の政治的性格も色濃く帯びていたというべきだろう(Sträter, S. 77; Holloran, S. 367)。この一件は選ばれた委員たちの慎重な審査によって結論が得られたのではなく、フランケの思惑が当たり、フリードリヒ王の一喝によって決着を見たのである。この介入がなければランゲ vs ヴォルフ論争もあるいは思想的に少しは深められたかも知れない。

この事件が当時のヨーロッパの、あるいはドイツの思想界にどれほどの影響を与えたか、定かではない。あるいは宗教書を巡って晩年のカントが遭遇した事件と共通する要素があるか、どうか。しかし「諸学部の争い」がここでも影を落としていたということはできる。さらには当時の絶対君主制ドイツのもとでの知識人と権力の関係についても、何事かを考えさせる事件だったかも知れない。この体制のもと大学教授の身分など、王の気分次第でどうにでもなる甚だ不安定なものだっただろう。「議論せよ、しかし服従せよ」のフリードリヒ大王の言葉をここでも噛みしめることができるのではないか。フリードリヒ王がこの事件を「言葉の問題」に還元したのは、この点で象徴的である。一七三九年九月のある書簡で王は次のようにいう。

> 余はこのきわめて曖昧な一件で裁判官を名乗るつもりはない。しかしこの世の続くかぎり哲学が存在し、ほとんどすべての人が大部分たんに言葉だけが問題であるというのであれば、あのランゲが穏当に振る舞いその優れた才能を啓発的で有用な問題に向けるなら余は満足である。(Hinrichs, S. 440)

ヴォルフが強調する「哲学する自由」（『詳解』第四章、『序説』第六章）も所詮は

宮廷権力に保護されたものだったと思われる。ヴォルフの著書に付された王侯貴顕への数々の麗々たる献辞を思い起こすのもよい。この点で象徴的であるのは、カントの『純粋理性批判』が当初ベルリン・アカデミー会員のランベルトに献呈される予定だったことである。ランベルトの死去によってこれは実現されなかったが。新しい献辞はプロイセン王国の文部大臣フォン・ツェートリッツ男爵に当てられた。

２　晩年のヴォルフ

終わりに最晩年のヴォルフの姿を見届けておかねばならない。ハレ帰還直後、物珍しさもあってヴォルフの講義の聴講生は多かった。沢山の裕福な学生をハレに呼び寄せるという大王の期待は叶えられたかに見えた。しかしやがて学生数は激減する。かつての学生の喝采はもはや講義室に響かなくなる。六一歳のヴォルフはマールブルクから新しいものを携えてこなかった。シュラーダーの辛辣な言い方によれば、学生たちは講壇上で「燃え尽きた」学者を目にしていたのである(Schrader, S. 321)。ヴォルフはヴォルフでハレ大学の学生たちの実力低下を慨嘆している。

四〇年代半ばにははやヴォルフに対する大王の寵愛も醒める。大王の関心はヴォルテールやモーペルテュイらヴォルフよりも若い世代のフランス啓蒙哲学者に移る。しかしヴォルフは彼らの哲学を認めない。一七四六年にはモーペルテュイがベルリン・アカデミーの総裁に就く。以降、アカデミーでは反ライプニッツ哲学の路線が敷かれる。当然それは反ヴォルフ路線に連結している。やがてヴォルフの哲学に対する大王の厳しい言葉が公に知られることになり、それは老残のヴォルフにとってかなり辛いものだっただろう(Droysen, 1910, S. 23)。加えて痛風でヴォルフの体調は思わしくない。夏でも寒い日は自宅に籠もらざるをえなかった。

他方、ハレ大学では世代交代が進んでいる。ヴォルフより三五歳年下のバウムガルテンの講義が、一七四〇年に彼がフランクフルト・アン・デア・オーダー大学に異動後にはその後を襲ったマイアーの講義が、学生間に絶大な人気を博する。マイアーの講義には実に三〇〇人の学生が集まった。両人はハレの大学と街に美学ブームを広める。バウムガルテンもマイアーもヴォルフ主義者だったが、しかしヴォルフにとって美学は肌に合わなかったようである。

ヴォルテールとの関係について触れておけば、二人は一七四三年、ハレで相見えている。フランス語が喋れないヴォルフはラテン語で会話したと伝えられている

(Kretscher, S. 441)。ヴォルテールはヴォルフのハレ帰還を言祝ぐ詩を書いている。またヴォルテールの恋人シャトレ侯爵夫人はヴォルフ哲学を贔屓したこともある。しかしこれは一時のものだった(Droysen, 1889; Thomann, 1968 ; 山本、二〇一〇年、四〇九頁)。

やがてピエティストに代わってもっと手強い論敵が国内の哲学陣営から登場する。トマジウス学派につながる一派である。一七五〇年にはもっとも恐るべきヴォルフ哲学批判者であるクルージウスの、根拠律に関する論文が現れる（山本、一九九〇年にその翻訳がある）。クルージウスは根拠概念を子細に区別することで根拠律の妥当範囲を厳密に確定し、あわせてカントのア・プリオリの総合判断のアイディアを先取する（山本、二〇一〇年、二五二頁）。シュトレーラーに始まるヴォルフ批判は神学者による批判を経てふたたび哲学者に、しかも強力鋭敏な論者に、受け継がれる。時代はポスト・ヴォルフの時代に入っていたのである。

このヴォルフ批判の潮流はやがてカントの批判哲学に流れ込んで激流となる。カントもまたクルージウスによる根拠律批判を継承するが、しかしクルージウスよりはヴォルフ主義に近い地点にいた。しかしながらカントは「独断のまどろみ」からの覚醒のもと、ドイツ学校哲学そのものに決定的な断絶を持ち込む。まさしく「一切を粉砕するカント」（メンデルスゾーン）であった。これによってまったく新しい真理概念と経験概念が彫琢される。ヴォルフ形而上学の脊梁である充足根拠律にもこれらの新しい概念によって画期的な解釈が加えられることになる（山本、二〇一〇年、一一三頁）。

一七五四年四月九日、キリスト受難聖金曜日、ヴォルフはしっかり意識を持ったまま泰然として亡くなる。彼の最後の言葉は「主よ、解放者よ、このときにあって我が心を強め給え」であった(Hinske, S. 408)。遺体は学校教会の墓地に埋葬される。そこにはバウムガルテンの墓地もある。二人の墓石には大文字の B と W が刻印されていた。墓標は二つとも大理石ではなく粗末な石だった。バウムガルテンは貧窮のうちに亡くなったが、しかしヴォルフは莫大な財産を残したはずである。息子の無情を嘆く言葉が伝えられている(Kertscher, S. 451)。

一七五九年、同じ墓地に妻のマリアも埋葬される。

文　献

第一次文献

Arndt, Hans Werner(ed): 1980. *Christian Wolff Biographie*, in: Christian Wolff Gesammelte Werke, Abt. 1, Bd. 10, Hildesheim (＝WW, I, 10)

Ludovici, Carl Günter: Artikel *Wolff(Christian)*, in: Johann Heinrich Zedlers Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste, préface de Jean École, G. Olms 2001, Bd. 68.

Gottsched, Johann Christoph: 1755. *Historische Lobschrift des Weiland Hoch＝und Wohlgebohrnen Herrn Christians, des H.R.R. Freyherrn von Wolf,* in: *Christian Wolff Biographie*, 1980, (hrsg)Arndt, Hans Werner.

Wolff, Christian: 1724. *Die vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, Anderer Theil, bestehend in ausführlichen Anmerckungen und zu besserem Verstande und bequemerem Gebrauche derselben*, 1760, in: WW I. 3 （『注解』）

: 1724. *Opuscula metaphysica*, édition critique avec introduction, notes et index par Jean École, in: WW II. 9 （『形而上学小論集』）

:1726. *Christian Wolffens Ausführliche Nachricht von seinen eigenen Schrifften, die er in deutscher Sprache von den verschiedenen Theilen der Welt＝Weißheit*, *heraus gegeben*, 1757, in : WW I . 9 （『詳解』）

: *Christian Wolffs eigene Lebens＝Beschreibung*（『ヴォルフ自伝』）, in: Hans Werner Arndt (hrsg),*Christian Wolff Biographie*, 1980.

： 1728. *Philosophia rationalis sive Logica, methodo scientifica pertractata et ad usum scientiarum atque vitae aptata. Praemittitur Discursus praeliminaris de philosophia in genere*, Frankfurt u. Leipzig 3 Bde., 1740, in: WW II, 1 - 3.（『ラテン語論理学』、『哲学序説』）

: 1755. *Meletemata mathematico-philosophica cum eruditio orbe literarum commercio communicata. Quibus accedunt dissertationes variae ejusdem argumenti et complura omnis eruditionis alia hinc illic disperse obvia.*

Halle in: WW II, 1. Hiledesheim 1974. （『数学形而上学研究論集』）

第二次文献

Albrecht, Miachel (hrsg): 1985. Einleitung in Christian Wolffs *Oratio de Sinarum philosophia practica* (Rede über die praktische Philosophie der Chinesen), 1726, Felix Meiner Verlag.

Arndt, Hans Werner: 1996. Einleitung zu Christian Wolffs *Ausführliche Nachricht von seinen eigenen Schrifften, die er in deutscher Sprache heraus gegeben,* Georg Olms Verlag.

Arnsperger, Walther: 1897. *Christian Wolffs Verhältnis zu Leibniz,* Weimar Verlag von Emil Felber.

Beutel, Albrecht: 2001. *Causa Woffiana Die Vertreibung Christian Wolffs aus Preußen 1723 als Kulminationspunkt des theologisch-politischen Konflikts zwischen halleschem Pietismus und Aufklrärungsphilosophie*, in: Wissenschaftliche Theologie und Kirchenleitung. FS Rolf Schräfer. HG. v. Ulrich Köpf. Thübingen.

Bianco, Bruno: 1989. *Freiheit gegen Fatalismus, Zu Joachim Langes Kritik an Wolff*, Wolfenbütteler Studien zur Aufklärung, Bd. 15, Zentrum der Aufklärung und Pietismus.

Corr, Charles A.: 1972. *Christian Wolff' s Treatment of scientific Discovery*, in: Journal of the History of Ideas, vol. 34.

: 1974. *Did Wolff follow Leibniz?* in: Akten des 4. internationalen Kant-Kongress.

: 1975. *Christian Wolff and Leibniz*, in: Journal of the History of Ideas, vol. 36.

Droysen, Hans: 1889. *Die Marquise du Châtelet, Voltaire und der Philosoph Christian Wolff*, in: Zeitschrift für französische Sprache und Literatur.

: 1910. *Friedrich Wilhelm I., Friedrich der Große und der Philosoph Christian Wolff*, in: Forschungen zur Brand.-Preuss. Gesch. Bd. 23, 1910.

École, Jean: 1984. Préface à Langes *Causa Dei et religionis naturalis adversus Atheismus, et, quae eum gigni, aut promovet, Pseudophilosohiam veterum ac recentiorem ,*

praesertim Stoiciam, Spinozianam ac Woffianam.

Fumiyasu, Ishikawa（石川文康）: 2011. 書評「井川義次著『宋学の西遷 近代啓蒙への道』（人文書院、二〇〇九年）、日本カント協会編日本カント研究第一二巻『カントと日本の哲学』、理想社、所収。

Hartmann, Georg Volckmar: 1737. *Anleitung zur Histoire der Leibnitzische –Wolffischen Philosophie*, Reprint: Hildesheim 1973.

Hinrichs, Carl: 1959. *Preußentum und Pietismus　Der Pietismus in Brandenburg-Preußen als religös-soziale Reformbewegung*,Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen.

Hinske, Norbert: Artikel *Wolff*, in: Literatur Lexikon, Autoren und Werke deutscher Sprache(c1988-c1993), Bd. 12, Bertelsmann Lexikon Verlag.

Holloran, John: 2004. *Wolff in Halle　—Banishment and Return*, in: Christian Wolff und die europäische Aufklärung, Akten des 1. Internationalen Christian-Wolff Kongresses, Halle (Saale), 4.-8. April 2004, Teil 5.

Igawa, Yositsgu（井川義次）: 2009. 『宋学の西遷 近代啓蒙への道』、人文書院。

Kertscher, Hans-Joachim: 2004. *Christian Wolffs zweiter Aufenthalt in Halle*, in: Christian Wolff und die europäische Aufklärung, Akten des 1. Internationalen Christian-Wolff Kongresses, Halle (Saale), 4.-8. April 2004, Teil 5.

Klemme, Heiner F., Kuhen, Manfred: 2010(Continuum). *The Dictionary of Eighteenth-Century German Philosophers*, 3 vols, British Library Cataloguing-in-Publication Data.

Madonna, Luigi Cataldi: 1987. *Wahrscheinlichkeit und wahrscheinliches Wissen in der Philosophie von Christian Wolff*, in: Studia Leibnitiana Bd. 21, 1987.

Raabe, Paul: 2004, *Christian Wolff in Halle*, in: Christian Wolff und die europäische Aufklärung, Akten des 1. Internationalen Christian-Wolff Kongresses, Halle(Saale), 4.-8. April 200, Teil 1.

Schrader, Wilhelm: 1894. *Geschichte der Friedrichs-Universität zu Halle,* F. Dümmler.

Sträter, Udo: 2001. *Wolffs Gegner Joachim Lange im Kontext der Theologischen Fakultät Halle*, in: Christian Wolff und die europäische Aufklärung, Akten des 1. Internationalen

Christian-Wolff-Kongresses, Halle(Saale), 4.-8. April 2004, Teil 3.

Thomann, Marcel: 1968. *Influence du philosophie allmend Christian Wolff(1679~1754) sur l'〈Encyclopédie〉 et la pensée politique et juridique du x viiie siécle francais*, in: Archives de Philosophie du droit, no. 13.

Weigl, Engelhard: 1997. *Schauplätze der deutschen Aufklärung : ein Städterundgang* (三島憲一、宮田敦訳、ヴァイグル『啓蒙の都市周遊』、岩波書店、一九九七年)

Wundt, Max: 1964. *Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung*, Georg Olms Verlagsbuchhandlung.

Wuttke, Heinrich: 1841. *Eine Abhandlung über Christian Wolffs eigene Lebens＝Beschreibung,* in: Hans Werner Arndt(hrsg),1980, *Christian Wolff Biographie*.

Yamamoto, Michio(山本道雄)

: 1990.「Chr. A. クルージウスの哲学 ― 経験的主観性の哲学」、文化学年報、神戸大学大学院、第九号、（付録･翻訳：Chr. A. クルージウス『決定根拠律の、あるいは通俗的には充足根拠律の、用法ならびに限界に関する哲学論考』）。

: 1992. 「ヴォルフの哲学方法論についてのノート ― 『ドイツ語論理学』を中心に ―」、『紀要』、神戸大学文学部、第一九号。

: 2010. 改訂増補版『カントとその時代 ― ドイツ啓蒙思想の一潮流』、晃洋書房。

（関西看護医療大学特任教授・神戸大学名誉教授）